

# 太 玄

会報 第76号

令和2年9月

太 玄 会

一、あいさつ

石川 流 芳 会 長……………1

宮 負 丁 香 理 事 長……………2

小 出 聖 州 事 務 局 長……………3

二、第61回太玄会書展

日 程 表……………4

役 員 及 び 各 部 部 長……………4

入 賞 ・ 入 選 者……………5

会 場 ・ 審 査 風 景……………8

授 賞 式 ・ 祝 賀 会……………9

作 品 解 説 ・ 席 上 揮 毫……………10

特 別 講 演……………11

役 員 挨 拶 祝 辞……………28

謝 辞……………30

三、令和2年度総会

資 料 掲 載……………31

四、太玄会所属団体のこの一年の活動

(平成31年4月～令和2年3月)

五、太玄会所属団体の活動予定……………49

六、特 集

宮 本 芳 秀……………50

望 月 擁 山……………51

山 崎 洋 子……………52

吉 田 恵 子……………53

編集後記 広報部



## 会長に就任して

会長 石川流芳

令和と改元されて初めての第六十一回太玄会書展は、六十周年記念という大きな歴史の山を越え、更なる飛躍をめざして開催された。会員各位のご協力により盛会裡に閉展出来たことは、今後の太玄会の発展に向けて明るい希望に満ちた六十一回展となった。

ところが、新型コロナウイルスの影響により、その後多くの書道展が中止を余儀なくされた。太玄会においても理事会、総会が中止となり、そのような混沌とした中で行なわれた運営委員会において、推挙により会長に就任する運びとなった。

世の中では、新型コロナウイルスの驚異により、テレワーク、オンライン学習等の新しい試みがなされ始めている。人類の歴史を振り返ると、困難を乗り越えた先にこそ発展があるように思う。

太玄会は他会に類をみない十五団体による集団指導態勢でそれぞれ個性的な書風を発表し合ってきた。今後も慣習に溺れることなく、これからの書道界、太玄会のためにどうあるべきかを考え各社中が切磋琢磨し合い、発展していける雰囲気を作っていければと思う次第である。



## 第六十一回太玄会書展を終えて

理事長 宮 負 丁 香

昨年六十回記念展を終え、同六月に記念祝賀会を多くの来賓をお迎えし盛会裡に無事終了することが出来、迎えた六十一回展も書道関係者をはじめ多数の来館者を数え終了することが出来ました。年令でいえば還暦という節目、新たな太玄会の船出がはじまります。

本年は例年著名な書家による講演会に日展会員の吉澤鐵之先生を講師に迎えました。太玄会に関わられた茨城県出身の吉澤鉄石先生（鐵之先生の父）、浅香鐵心先生、大久保龍石先生、平尾孤往先生にまつわるエピソード等ユーモアたっぷりのお話には聞く人を引きつけ皆熱心に聞き入っておりました。

又、展覧会においては新たに高校生部の設けたところ出品者も九十名と減少傾向にあった出品点数も増加し、この企画が

若い人達の書道離れに少しでも歯止めがかかればと来年以降も継続して行なうことが決まっております。

新型コロナウイルスの蔓延で外出するもままならず太玄会の理事会、総会も中止となりました。様々な催しの中止、延期に追い込まれ先の見えない状態が続いております。一日も早い終息を願うばかりです。太玄会は主義主張の違う十五団体の集まりで現在まで運営されてきました。会員の皆様には他社中、自社中互いに切磋琢磨しながら更に魅力ある作品制作に励んでいただきたいと願います。



## 令和二年度定期総会のこと

事務局長 小出 聖州

太玄会書展開催中の上野のドラッグストアでの一コマ。カットパンを手にしてレジに並んだ私の前には数人の列が。それぞれが買物カゴに一杯のマスクの箱。『早くしてよ』とイライラしながら待っていると、聞こえてくるのは中国語。『こんなに

高張るものを大量に買ってどうするんだか』と呆れていた自分を、今思うと『何と先見の明が無かったことか』と悔やむのみ。

その後のことは敢えて記すまでもない。そして、令和2年度の太玄会総会の開催は中止せざるを得なくなった。

太玄会が発足して六十一年を経ての初めての出来事。太玄の十五社中がワンチームとなってこの難局をどう乗り切っていくばいいのかという試練の新年度入りとなった。

総会の開催に向けて既に過半数の方々の委任状を頂いてはいしたが、この逆境の中に有ってこそ個々人がこの機会を捉えて太玄会の存在意義を問い直して欲しいという宮負理事長の意を受けて、準会員以上のすべての方に議案書を送付し審議を依頼

した。

結果、すべての議案が全会員一致して承認されることとなった。これも偏に社中代表の先生方を始めとする多くの先生方の普段の真摯な取り組みが評価されたが故と感謝したい。

しかし議案書の可決は単に入口を通過したに過ぎない。新型コロナウイルス感染の終焉が見えない中で、如何にして第62回太玄会書展を成功に導くかという命題をクリアしなければならぬ。例年好評の講演会は見送らざるを得ない。席上揮毫と作品解説会も心許ない。となれば、より一層作品の質が問われることを肝に銘じたい。

また昨年度から高校生の部を新設したが、予想を超える出品点数を集めることが出来た。今後、更なる発展が求められよう。太玄会はまだまだ発展途上、課題は山積している。一丸となって課題解決に当たるべく、建設的な意見をお寄せ頂ければ幸いです。

# 第61回 太玄会書展 [併催 第4回学生選抜展]

## 日程表

年月	日	曜	作業内容	時間	会場	担当部
21	7	火	搬入	10:00～12:00	都美搬入室	搬出入部
8	8	水	会員賞選考	11:00～	都美審査室	審査事務部
9	9	木	鑑別・審査	11:00～	〃	〃
19	19	日	陳列	10:00～	都美展示室	陳列部
21	21	火	開会	9:30～17:30	都美展示室	会場当番
22	22	水	特別講演会	14:00～	都美講堂	〃
23	23	木	開会	9:30～17:30	都美展示室	〃
24	24	金	開会	〃	〃	〃
25	25	土	開会	9:30～17:30	都美展示室	〃
26	26	日	最終撤去式 授賞式 祝賀会	9:30～14:00 16:30～	都美展示室 上野精養軒	搬出入部 渉外接待部 褒賞部 祝賀会部

## 役員及び各部部长

名誉顧問	梅原清山	理事・総務	石島廻山
常任顧問	福田丞洲	理事・総務	遠藤有翠
常任顧問	田中鳳柳	理事・総務	木全珠香
常任顧問	笠原聖雲	理事・総務	植木蒼穹
会長	垣内楊石	理事・総務	鎌田龍祥
副会長	石川流芳	理事・総務	中尾勝子
副会長	西村東軒	理事・総務	高橋心行
副会長	露野雅宣	監事	中田珪川
理事	鈴木映華	監事	下谷蘓雪
理事	瀧沢曲峰	會計部長	露野祐涯
理事	小原天籟	事業部長	荒井湧山
理事	伊東玲翠	広報部長	石井蕙園
理事	宮負丁香	渉外接待部長	小林碧桃
理事	金丸鬼山	図録部長	山口香葉
理事	伊場英白	搬出入部長	山村鳳羽
理事	小出聖州	審査事務部長	伊藤慈恩
理事	江原見山	陳列部長	小泉興起
理事	大場大幹	褒賞部長	大河原由佳
理事	下谷蘓雪	祝賀会部長	鳥越新芽
理事	飛田冲曠	学生部長	
理事	海野十方		

# 第61回 太玄会書展入賞・入選者

## 理事の部

太玄大賞(五十音順)

宮本芳秀 望月擁山 山崎洋子 吉田恵子

## 審査会員の部

太玄賞(五十音順)

小林桂葉 鈴木竹園 谷本藍泉 田村史子

全日本書道連盟賞(五十音順)

田辺水月 時田大祥 日置雅有

## 会員の部

特別賞(五十音順)

尾崎清爽 京増瑞葩 中川蘭葉 中山高鳳

龍頭溪仙

奨励賞(五十音順)

荒井珠鶴 飯田歌林 齋藤廣遙 高野秀影

芳賀光珠

会員新人賞(五十音順)

牛澤智水 大木操守 川井韶瑞 佐藤紫泉

高橋玉泉 玉井思醉 富本瑠瑩 松井芙蓉  
山崎のり子

## 準会員の部

推選(五十音順)

青木爽游	石井茜音	石井白玲	泉桐艶
井出隆鳳	大熊蕙玉	小澤雲峰	垣内一楊
鎌形美容	上西秀峰	毛塚佳泉	小暮兆琳
猿田紫陽	下間佳璋	莊保浩子	菅谷弘麗
鈴木光鶴	鈴木智子	竹内翠紗	田中さち子
西方勇玳	福塚光徳	藤田寿仙	藤田晶洋
細測金杏	増測香泉	松永愛泉	

準推選(五十音順)	相木小百合	赤石爽楓	秋山硯光	阿部弘信
	安藤翠珠	伊藤聖夏	菴澤御櫻	印南醉豊
	牛口仙桃	宇田川翠扇	内田黄鳥	大坂八知枝
	小川美笙	方波見早子	草間清晨	沓澤絵梨
	黒木秀麗	国分滋潤	小菅啓子	小松崎紫流
	坂栄華	佐々木玉峰	佐藤郷月	佐野富雄
	佐原美醉	塩崎素我	清水嶺花	高橋紅葩
	只野藻景	土屋爽流	手島萬峰	中村丹裳
	中元玉蘭	中山志峰	中山智加江	夏日紅恵
	根本恵和	葩島召泉	橋本三千子	長谷川照葉
	東山彩翠	平野渚秋	福岡華泉	藤原芳苑

公寡の部

増田澄靖 松浦桃苑 松原秋邨 宮本恵玉  
 茂木朱櫻 守田禎香 矢野松翠 山井奈々子  
 山岸信彦 山口京子 山田晞瑠 山本碧霄  
 油井謙輝 渡辺仁美

特選(五十音順)

阿部 寛 荒井蓬月 石田正道 稲生妙子  
 井堀咲麗子 岩間鶴巢 植松走風 大塚美代子  
 小澤奈穂美 小野翠香 風間翠泉 金井薫姚  
 小岩瑞季 斉藤光天 笹木瑞希 重田江彩  
 杉山香雨 蘭田紫苑 竹本萩嶺 寺崎醉炎  
 豊田浩美 南雲鷺草 長谷川洸春 平野豊溢  
 穂積青潭 本間直人 増田青溪 森 千花  
 山田静光 横瀬克江 米倉喜美代

準特選(五十音順)

青柳健次 荒井桃子 池田華遙 石井鏡子  
 石井梅香 一乗敬子 今井香澄 上村霽麗  
 瓜田余響 大井綾華 大川華風 大河原佳子  
 大熊 勇 太田君江 大場青峰 岡島寿石  
 岡本美佳 小川光慶 小澤洋子 甲斐谷朋隣  
 片倉 幸 片山廣楓 勝畑喜市郎 金丸崙山  
 狩生久美子 川井右京 川島遙青 川端紫雲  
 川畑美風 木下正覚 窪田静花 黒田真弓

入選(五十音順)

小池礼凌 小出厚隆 坂口白峰 櫻田明道  
 佐々木芳華 佐藤 英 佐藤桐撰 佐藤実夢  
 佐藤保恵 佐藤優衣 眞田星鳥 塩澤智加  
 志村 恵 杉山雅子 鈴木麻美 高橋翠嶺  
 高橋秀俊 竹治青麗 田所佐季 田中春擘  
 玉井香敬 田村游古 東瀬青綬 徳永慈峽  
 豊嶋智勇 内藤芳則 長尾和香 中山さおり  
 奈良京華 橋本粹花 長谷川恵子 福島征英  
 藤崎澄瑩 藤沢貞行 藤田靄香 堀江直美  
 松尾太一 松沢上清 松野浩範 丸山兆基  
 矢田貝恭子 横瀬晃子 横田亜矢子 依田紅瑞  
 綿内良子 渡邊青羅 渡辺抱琴

赤塚智子 荒原香堂 飯田小夜子 石井宗艶  
 石川清香 板垣杏奈 伊藤兆菜 伊藤幹夫  
 榎本輝映 大木起代子 大森栄芳 大山紫彩  
 岡田信来 岡田元恵 小田順子 小野田子雪  
 片岡久美子 加藤紅苑 金子きみ代 川谷淳一  
 川原江以子 城所そら 草間秀幸 国吉和子  
 熊谷 弘 倉嶋秀明 倉持昌世 栗本 暁  
 河野真実 高 利江 小杉恵美子 小林富子  
 小林ひな子 小山紫春 櫻井美津枝 佐々木啓春  
 佐藤榮壽 佐鳥光浩 島本和樹 清水享鶴  
 下原春樹 仁多玲風 菅原董泉 杉山葉月

古屋佳朋	田坂璃乃	下中真子	木下晴賀	相川未羽	準特選 (五十音順)	吉田愛	山田緑水	村山すゝ江	三浦嘉乃	牧野彩香	福田佳子	原田勝枝	野坂翠絹	西岡翠蘭	内藤愛	谷澤藤花	田中恵美	高橋越雲	高井則子	鈴木光濟
吉田真由子	田羅原由侑	鈴木光	小出聖来	池田新奈		吉田直美	山田緑亭	森敬子	水吉福子	松浦直子	福本澄鮮	広沢光香	能瀬ゑみ	西岡美知江	中島みつ子	谷丹霞	田中多加代	高橋幸江	高内芝蘭	鈴木教子
	千葉誠	高田将叶	佐藤美優	宇野彩夏		米澤志織	山野井青蘭	山浦柚美	宗島余光	松本寛恵	古谷幸子	廣瀬美保	長谷川理華	西澤緑風	長橋葉鶴	千野霜月	田中嶺華	高柳浩美	高木睦子	須藤隆史
	長谷川明音	高知尾優香	佐藤もも葉	喜多村藍子		渡邊真理子	横島輝枝	山上尚子	村上千恵子	三浦道子	牧島孝真	深川兆瑤	林葵丘	根本由紀	永山由佳	手塚恵翠	田邊明子	竹内百紀江	高野房枝	染谷君恵

																					入選 (五十音順)	
																						秋山琴乃
																						荒井優花
																						飯田そら
																						飯塚康丞
																						上野裕子
																						上山紗也加
																						北澤実愛
																						申橋緑波
																						小山葵
																						佐久間詩織
																						清水梨央
																						竹内理乃
																						千葉芳樹
																						豊岡桜
																						中村結希乃
																						成田晴哉
																						藤川大輝
																						松田汐織
																						矢花優奈
																						湯浅莉弓
																						吉川光輝
																						渡部明郁

# 第61回 太玄会書展 会場風景

令和2年1月21日(火)～26日(日) 会場:東京都美術館



会場風景



陳列風景



学生展



DVDコーナー



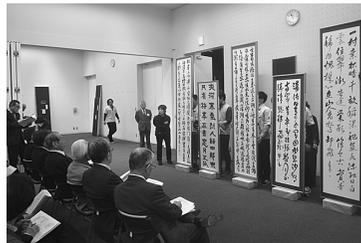
会場風景

# 第61回 太玄会書展 審査風景

令和2年1月8日(水)～9日(木) 会場:東京都美術館



審査2日目



審査1日目



学生展審査風景



会員賞選考風景



審査2日目

# 第61回 太玄会書展 授賞式・祝賀会

令和2年1月26日(日)16時30分開始 会場：上野精養軒

## 授賞式



運営委員



審査事務報告  
山村鳳羽審査事務部長



挨拶  
宮負丁香理事長



開会の辞  
伊場英白副理事長



太玄賞受賞者



太玄大賞受賞者



当番審査員



会員新人賞受賞者



奨励賞受賞者



特別賞受賞者



全日本書道連盟賞受賞者

## 祝賀会



日展特選受賞のお祝い  
宮負丁香理事長



来賓祝辞  
日展理事 高木聖雨先生



挨拶  
垣内楊石会長



開会の辞  
落野雅宣副会長



閉会の辞  
西村東軒副会長



祝賀会風景



乾杯  
笠原聖雲常任顧問

## 作品解説



落野雅宜 副会長



石川流芳 副会長



西村東軒 副会長



瀧沢曲峰 董事



小原天簫 董事

## 席上揮毫



副事務局長 飛田冲曠先生



理事・実行委員 嶋田白染先生



理事・実行委員 大河原由佳先生



副事務局長 江原見山先生



副事務局長 大場大幹先生



理事・実行委員 小林碧桃先生



理事・実行委員 鳥越新芽先生



理事・実行委員 橋本春溪先生



運営委員 海野十方先生



理事・実行委員 田中恵康先生



理事・実行委員 植村暁恵先生



理事・実行委員 藤岡悠苑先生



理事長 宮負丁香先生



理事・実行委員 笹井芝雪先生



理事・実行委員 小山泰雲先生



理事・実行委員 會田春燕先生



事務局長 小出聖州先生



副理事長 伊場英白先生

## 特別講演

演題：「私と書」  
講師：吉澤鐵之先生

### ◎講師紹介【宮負丁香理事長】

失礼いたします。特別講演ということで、五年前から都美術館講堂を借りて講演会を開催していますが、一回目が河野隆先生、二回目が高木聖雨先生、三回目が岡野厚先生、四回目が高木厚人先生、そして昨年度の五回目が大東文化大学の高橋利郎先生にお話をいただきました。日本有数の方にご講演を賜わるということで、今年は吉澤鐵之先生にお願いしましたところ快諾していただきまして、今日に至りました。

皆さんのお手元に吉澤先生のプロフィールをお配りしていますが、吉澤先生は昭和二九年のお生まれで、茨城県のご出身です。皆様にご承知のとおり、吉澤先生は、日本でもたぶんお一人じゃないかと思うのですけれども、自作の漢詩を作品で発表している方です。我々も本当はそうしたいのですけれども、なかなかそういう勉強ができなくて、自分の詩を書くということができませぬ。そういう意味では、吉澤先生に今日「私と書」という演題でお話をしたいただくことになりましたけれども、皆さんにとってもたいへん興味深く、ためになるお話を聞



けると思いますので、どうぞしっかりと勉強していただければと思います。吉澤先生、どうぞよろしくお願いいたします。

### 【吉澤鐵之先生】

こんにちは、吉澤鐵之です。今、快諾と言われたのですが、本日は少々壇上が上がっております。一年くらい前に西村東軒先生にこのお話を頂きまして、先生に言われると私、嫌って言えない関係なんです。同じ二九年生まれで西村先生は誕生日が二日前なんです。先輩なので、いろいろ世話になって今日までできているので、西村先生から言われたら嫌って言えなくて仕方なくここに来ました（笑）。今、ためになるって言われましたが、何もためになることはないと思いますので、この一時間「あははっ」っていうのがちょっとでもあつて、楽しめればいいかなと思って、お聞きいただければありがたいと思っています。

実は私、太玄会と少なからぬ縁がありまして、私の父が元々は太玄会に入っていて、当時師事していた先生が平尾孤往先生でした。平尾先生が色々なことがあつて書道界を引退してから、私、平尾先生のところへ遊びに行っていた最後の弟子でした。そういうことで、太玄会



というのは私にとって気になる存在でして、そのことを今回申し上げることになるのかなと思って、引き受けた次第です。

私の本名は南の樹で「南樹」（なみき）といいます。昔は「鐵子」として、青山先生が「鐵心の子か鉄石の子かどっちだ」なんて言われながら鐵子とつけましたが、色々事情がありまして、四一歳の頃から「鐵之」としました。

生まれは常陸太田市（旧里美村）といまして、茨城県のいちばん北です。お日さまが一〇時くらいに出て三時くらいには隠れちゃうような、そういう山間部で育ちました。その後、二〇歳の頃に水戸へ出てきて、今も水戸に住んでおります。現在は日展の会員で、二度ほど審査員をさせてもらっております。全国書美術振興会の評議員、全国書道連盟の理事、全日本漢詩連盟の理事を務めています。先ほど宮負先生からご紹介を頂いたように、漢詩のほうも一生懸命しています。なぜ漢詩をやっているかは、後ほどご説明したいと思います。それから、読売書法会の常任理事、日本書作院の副理事長も務めています。母体は日本書作院です。その他には県内で茨城書道美術振興会の理事長を務めており、自分では『書魁』という雑誌を発行しています。

次に、吉澤家書家系図というのを作ってきました。水戸へ行かれると吉澤という苗字はいっぱいあります。先ほど言った太玄会にも出したことのある父が、大正一五年生まれで、吉澤鉄石といっています。日展の特選を二回とって、審査員を目の前にして六二歳で亡くなりました。その子どもに男が四人います。一番上は石琥、本名は成人（しげと）といいますが、成人式の一月一五日に生まれたので成人。それから、次男は去年日展で審査員をしました龍二、二番目なので龍



図1



図2

二、劉石。そして私が三番目で、四番目は銀行員で堅気の仕事につきましたが、他の三人はみんな書を志しましたが不安定な仕事です（笑）。二番目の劉石の妻の有岐子も日展に入っております。石琥の子どもは三人います。長男の衡石、年矢というのが日展に三〜四回入っています。それから私には子どもが二人いて、長男が太雅といまして、これも日展に五〜六回入っています。妻がやはり筑波の後輩で、仮名をやっております。この間芸術院の会員になった黒田賢一先生の弟子です。そういうわけで書を志すのが全員で七人です。ちなみに、吉澤大淳先生は親戚じゃありません（笑）。よく間違えられるのですが、そういう家族構成になっております。

この写真（図1）は、兄弟四人そろったところです。一番右が石琥、隣が劉石、続いて私と弟。うちの父は、真っ白な白髪

で芸術家らしかったんです。みんなそれに憧れて書を始めました。でも、全員違っちゃったんですね。いちばん下の書をやってない弟だけが髪の毛フサフサなんですが、他はみんな薄くなっちゃったんですね（笑）。私だけ、この写真の時よりあとに眼鏡を替えて、ちよつと違いを出していますが。これは「心如鐵石（こころつてっせきのごとし）」で、「うちの親父を慕っていますよ」ってことで、四人で合作をしたものです。

それから、これは太玄会の初期の頃だと思えます（図2）。左が平尾先生、スマートで、ダンディで、その当時青山杉雨先生も平尾先生のファッションのまねをしていたってよく聞きますが、すごくスラッとしています。その右がうちの父です。これまだ白髪になっていませんから四〇歳ちよつとでしょうかね。それから浅香先生、その隣が大久保龍石先生で早くに亡くなりました。五一歳くらいだったでしょうか。この三人が書作院をつくって、今それを私どもが守っています。全員昭和三四年くらいに平尾先生に師事していました。



図3



図4

それから、この写真（図3）は昭和三十七年の頃の写真です。上野の宿舎にて、右から鉄石、龍石先生と私。まだ元気に中央へ飛び出していった頃ですね。でも、大久保先生のところはもう書作院から抜けちゃいましたし、今、浅香先生社中とうちの社中が中心で書作院はやっております。

これは浅香先生とうちの父（図4）。やはり同じ頃でしょうか。浅香先生は昭和元年生まれで、うちの父は大正一五年。同じ年なのですが、浅香先生は二月二五日か二六日で、昭和元年の本当に少ない日に生まれて、運がすごく強かったんでしょうかね。それで、平成になった時には日本テレビに呼ばれて「平成」というのを大書して、それも昭和元年に生まれという縁で呼ばれていました。浅香先生は本当に前へ前へ進むっていう力強い先生でしたが、うちの父は対照的で、後から仕方なくついていくような、引きずられているような性格で、女房役ってよく言われていました。この二人が、大久保先生が早く亡くなられてからやっていたんですが、うちの父が昭和六二年に亡くなり、その後浅香先生が平成九年に七一歳で亡くなっていますから、書作院は早くにこの二人を亡くしています。茨城県はその他にも、佐川倩崖先生の父、佐川翠龍先生も五一か五二歳で亡くなっています。大久保先生もやはり五一か五二歳で亡くなっています。大久保先生のところは婿養子に入った大久保子龍さんも五四歳くらいかな。みんな早死になんです。茨城県は。そして、佐川倩崖先生まで、我々で元気に頑張ろうねって言っていたのですが、やはり六四歳で亡くなってしまいました。茨城県から東京へはそんなに遠くないですが、通い疲れちゃうのかわかりませんが、早死にするので気を付けているところです。

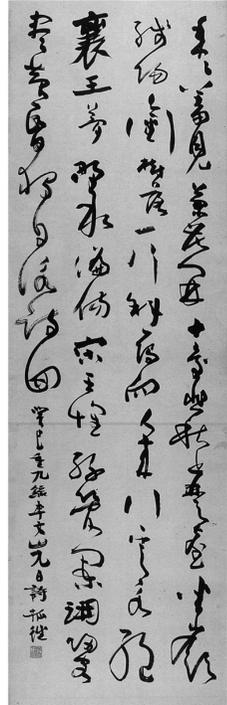
ここからは、まず初めに平尾孤往先生についてご紹介をします。ありがたいことに、以前の田宮文平先生の講演録（太玄会主催）に詳しく書いてあります。私が平尾先生のところに行ったのは、先生が引退してからです。なぜ行ったかという点、実はアトピーやなんか小さい頃からありまして、とても大学に行ったり、生活したりするのが無理だったということもあり、高校の頃から書を始めたのですが、父がその頃から大変だなんだって稽古の代役をさせられるんですよ。そこで、高校生の頃から教え始めたんです。そのうち、大人も教えてくれなんていうふうになっちゃいまして、高校の途中で早引きして、稽古したこともありまして。その頃うちの兄二人は私立の大学へ行っていました、うちの父としては、もう一人大学へ行かれると経済的に困ったんでしょうね。私も病気があって、もう稽古もずいぶんやっていますので、「もうおやじのかばん持ちするよ」って言ったたら、「本当にいいんだな、自分で決めたんだな」って論ざれまして、かばん持ちをして過ごすことになったんです。「その代わりに平尾先生の所へ連れて行ってくれ」と途中でうちのおやじに頼みました。その頃、自分の理論としては、先生に習うとその半分まではうまくなる。こういう先生に習ったらその半分まで。じゃあ、偉い先生につかないと書はうまくならないっていうのが自分の理論の中にありまして、うちの父とか、浅香先生の先生に習いたっていう気持ちがありましたので、むりやり連れて行ってもらうように話をしたんですね。

平尾先生はもう引退してしまっていて、いいおじいちゃん、七一か七十二歳くらいだったんです。スラックとしていてね。「まあ遊びに来るならいいよ」とか言ってくれて、作品を持っていったら見てくれたりするんです。毎回行くたびに孫のような私ですからお土産をくれるんです。

よ。硯をくれたり、拓本をくれたり、いろんな物を毎回くれて、そのたびにうちの父と一緒に帰ってくる電車の中で、「いいな、いいな、俺なんか何ももらえなかった」と言っていました。「昔はとにかく平尾先生は厳しくて、怖くて、今のような感じじゃなくて、いいな」ってよく羨ましがられました。平尾先生のところへ行くと必ず浅香先生があとから来て、「来ていたのか」なんて言われました。ですから、浅香鐵心、吉澤鉄石、吉澤鐵之、鐵という字をいだけているのはその流れということもあるんです。書作院に鐵という字を付けてる人は、それ以外にはいません。平尾先生の本名が「鋼」というんですね。鋼鉄の鋼。それで、その音を取って「孤往」という雅号なんです、君たちは私ほどは硬くないだろうから」って鐵心、鉄石と付けてくれたんだそうです。浅香先生とうちの父に鉄を付けた。私も最後にちらっと行ってしまったので、浅香先生からお許しを頂いて、鐵という字をもらった。現在、平尾先生に接見したっていうのは書作院で私一人だけになっちゃいましたので、これを大事に守っていかないと駄目だなと思っております。

さて、平尾先生の作品です（図5）。ご覧になったことあるでしょうか。右が昭和二八年、まだ太玄会をつくる前だと思います。それから、真ん中が昭和三一年、日展に出した作品です。

左が昭和三九年、第七回日展に出した作品です。いちばん左は半切くらい作品でした。自分の代表作と認識していたのか、自慢して先生のおうちに置いていらっしやいました。二行目の縦線は、プイッと一発引っ張っていて、それが非常に印象的で、そのあと浅香先生もこれをまねしてずいぶん縦線なんかやりましたが、その元になりました。その後の字はかなり変わっていききました。平尾先生の書風はいかにも



昭和三十年 第十三回 展1-6-6



図5



昭和二十九年 第七回 日 展1-6-6-6

文人的で一つに固まらないですね。篆隸楷行草いろんなものを書き分けて、それで風雅なものがあります。真ん中の作品は落款に「詩書」と書いてありますが、これは自分の詩を書いていきます。平尾先生は詩人でもあったんですね。私も詩まで習っておけばよかったです。篆刻と書は見てもらったんですが、その頃まだ詩の方は気がつかなくて、今考えると詩の話もしたかったなと思います。長文を持っていくと全部読まれちゃうんです。「この字違っているよ、ここ字が抜けているよ」と、そういう指導されました。字っていうのは書くだけじゃなくて中身が大事なんだなっていうのは、感化された記憶があ

ります。

次はこちら(図6)の写真。上が昭和三十七年の現代書道二十人展。二十人展には三、四回くらい出しているんですね。「敦學半(おしうるはまなぶのなかばなり)」という『尚書』の語を書いたとあります。それから右は、太玄展に出したものだそうです。印がかなり大きいですから作品自体は小さいのかなと思います。左下は、どこかに出したわけじゃなくて、私のうちに今飾ってある作品ですが、絹本に書かれたものです。昭和三〇年、平尾調子という独特な、学者みたいな字がつくられ始めた頃だと思えます。昔うちの父が、「平尾先生、何の法帖を基にしてこういう字をつくられたんですか」って聞いたたら、「ウフフツて笑って答えてくれなかった」っていうんですが、どうも鄭板橋あたりが基なんじゃないかなってよくうちの父は言っていましたね。

これは(図7)左は篆書で、これも変わった作品だと思えます。平尾先生は、呉昌碩の石鼓文のいい拓本を持っています、平尾の石鼓文って有名だったそうなんです。よく西嶋慎一先生は、「あれ



昭和37年 第6回 現代書道二十人展 (35×135)



昭和30年 (35×135)



昭和三十年 太玄展 (35×135)

図6

はどこにいったかね」なんて話をするんですが、今は散佚してないんです。篆書や篆刻も非常に勉強していましたから、平尾先生に刻ってもらったつていう人が書道界ではずいぶんいらっしやいますね。右は隷書の作品。こうして見てもバラエティに富んでいる。いろんな作品を書いていると思うんですね。

これは「冬日可愛（とうじつあいすべし）」（図8）です。二十人展のための書作ということで、おそらく二組くらい書いたものの一組なんだろうと思いますが、これも今うちにあります。懐が大きくてたつぷりした作品だと思えます。こういう作品、今見なくなりましたね。

そういうことで、平尾先生はいろんなことがあって昭和四〇年代くらいに書道界を辞められたんですよ。この間の田宮先生の講演にもありましたが、文人らしい、文人のよくな書家です。でも時代は高度成長期で、青山杉雨先生、それから村上三島先生なんかがだんだん台頭してきて、文人的な要素から、数の重みの書道界になっていった時に、おそらく平尾先生の文人的な



図8



図7

考え方は、いくらかそぐわなくなってきたんだと思うんです。そして、平尾先生は「自分の居場所がなくなつたな」っていうことで、あつさり書道界を辞めちゃうんですね。日展もなにも全部辞めちゃうつて。その後、私らが訪ねた時、昔勤めていた法政大学の方が来ると、小柄な奥様が、「お父さん、法政大学の人が来てるんだけど」「うん、いないつて言つとけ」「お父さん、聞こえますよ」つて（笑）。聞こえる所でそういうふうな返事をされて。平尾先生の言葉では、「会いたい人と会いたくない人とあるんだよ」なんて言つていた記憶があります。そういうふうには平尾先生は、最期には一人で亡くなつていって、まさに雅号の孤独で往くという「孤往つてそのとおりになつちやつたな」つて、うちの父が回想していましたが、いい思い出をいくつか残していただきました。

さて、今度は浅香先生のことをご紹介します。浅香先生は、先ほど言つたようにうちの父より一つ若いんです。下館、今は筑西市といいますが、うちはもう山奥で水戸まで出てくるだけでももう大変な時間がかかつたんですが、浅香先生のところは東京に近いですね。それで、最初に平尾先生に師事します。法政大学の夏期講習に出たりして平尾先生を知つて、平尾先生に師事しました。その当時、佐川倩屋先生は青山先生につき、それから高萩の鈴木赫鳳先生は殿村藍田先生につきました。その時に、浅香、吉澤、大久保の三先生は平尾先生にいたんですね。それはなぜかつていうと、手本を書いてくれない先生だから。ですから、これから紹介する三人、作風が全然違います。それぞれの個性を持つべき、そういう指導を受けた、そういう指導を受けられる先生だからつたという、これが三人の特徴かなと思います。



特選受賞作 昭和二十六年 日展 (2975) (6)



図9

さて、浅香先生の作品（図9）。左は昭和三六年の時に日展で特選をとった作品です。これは太玄会に属している時にとったんじゃないかなと思えますが、すごく活動的な作品ですね。絹本だったかな。右はやはり日展の作品で、金紙に書いたもので、もういかにも浅香鐵心調っていう活動的なもの。いくらか殿村先生とかを意識したような字なんでしょうかね。浅香先生の字はこういう元気のいい字でした。

そして、私の父の字になります（図10）、これは昭和五〇年代でちよつと遅れますが、二回目の特選をとった時の作品です。いくらか根底にあるのは富岡鉄斎とかさういったものと思います。それから、地元の小川芋銭っていう画家がいます、その字が好きだったりするのも影響されたと思いますが、かなり入念な作ですね。これも絹本に書かれたものです。

それから、こちら（図11）の左はそのあとの五七年に書かれたもの

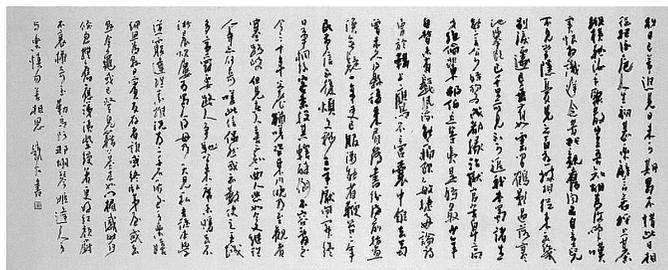


図10 特選受賞作 昭和56年 第13回 日展 (78×180)

で、自由に、浅香先生とは全然体質の違う書風を書いておられます。なかなか独特な字なんで私らもこの字はちよつとまねできません。で、私も、うちの父も手本を書いてもらったこともなく今日までずっと来ましたんで、またこれとも違う字を私は書いています。右側は卷子ですね。こういういかにも田舎っぽい素朴な字が、うちのおやじの独特な書風でした。

それから、大久保龍石先生（図12）。若くして亡くなったんですが、大久保先生はこういう字です。五一〜五二歳で亡くなってますからそれ以前、四二歳とか、四三歳とか、だいたいそのくらいの字です。大久保先生は途中から書作院に入り先生は元々は横浜の生まれで、疎



図11



開して茨城県の石岡っていう所に移り住みました。ですから、うちの父なんかは田舎者ですが、大久保先生は都会的だったんですよ。三人の中では一番センスがあったかなって最近では言われますね。ただ、うちの父と浅香先生は早くから知り合いだったので、浅香先生が一回特選で審査員をして、その後うちの父の特選を担いで運動なんかした時に、大久保先生は蚊帳の外だったらしく、それをひがんで出てこなくなっちゃいました。大久保先生は、本当は自分の方が力があるって思っていたんじゃないかな。同じ年代だったら、確かに大久保先生の方が良かったんです。ただ、うちの父は晩年になってだんだん良くなってきたんです。それは先ほども言ったように、芋錢だとか鉄斎

昭和四十九年 第六回日展 (Tokyo National Exhibition)



昭和四十二年 第十九回日展 (Tokyo National Exhibition)



図12

とか画家の書、これに傾倒していききましたから、他の人とは少し違っています、鉄石らしさが出て、これなら特選、なるほどなという字が出てきていたのです。昭和五〇年に鉄石が初めて特選をとるのですが、その当時は、ちょうどこの右側の昭和四十九年の作品とかね、大久保先生は自分の方が才能があるのになって思っていたような気がいたします。



図13

そういうわけで、三人三様の書を書いていたのは、平尾先生の指導のたまものだと思います。

ここで、平尾先生との思い出ということで、ちょっとだけ戴いた物の写真を撮ってきました(図13)。一辺が八センチ位の小さいサイズの硯なんです、うしろに柄がいつぱいあって、少し側面がふつらして、「これは篆刻家ならばよだれが出るような硯なんだよ」と平尾先生が言いながらくれたんですよ。うちのおやじからは、さっきも言ったように、「いいな、いいな」って羨ましがられて。それから、行き始めて一年くらいして、私、肺炎の病気になるっちゃいまして入院したんです。そうしたら、平尾先生がお見舞いをくれたんですよ。その時のお見舞い袋がこの硯なんです。中国で買われた物だろうなと思うんですが、これも大事に宝物にしてあります。そのほか行くたびに

物をくれて、それが私のいちばんの支えになりました。ですから、先ほど言いましたように漢詩もやるようになったのはやはり平尾先生の影響だと思っています。平尾先生その文人的なものを継いで、篆刻もやり漢詩もやりつていうのは、私の中にうごめいている平尾先生への憧れ、あるいは一番最後の弟子と自認していますから、それを守るという気持ちがあつて、漢詩までやっていこうな感じがあります。

この扁額(図14)ですが、右側の字を何て読むか、分かりますでしょうか。字典に載っていません。「蘭(あけび)」という字。「蘭盃(あけびあん)」つていうのは、実は落款のところに「孤往道長正(こどうちようせい) 竹雨泰(ちくうやすし)」とあつて、これは土屋平尾先生が平尾先生に書いてくださったものです。平尾先生のおうちには、一生懸命見渡したんですがどこにあるのか分からないんですが、あけびが植えてあつたらしいんです。季節になるとあけびがなつたんだと思うんですが、それで蘭盃つていうのを平尾先生が造語された。それを漢詩の先輩だった土屋先生が書いてくれたんです。

土屋先生は大東文化大学の初代学長を務めた人で、漢詩界の大御所でした。「佐久間太熙堂」なんて字も酔つ払つてその場で書いたんだなんて言っています。書家の範疇には入っていませんし、漢詩人の印象が色濃いですが、書も書き、あるいは絵も描き、やはり文人だ

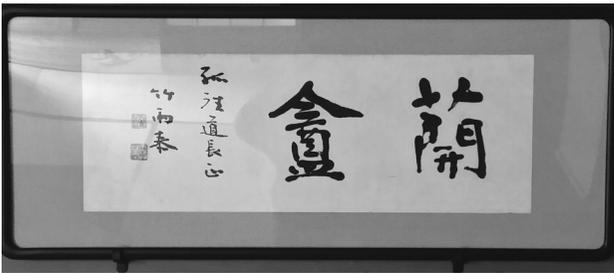


図14

つたんですね。また、平尾先生の師匠は、土屋竹雨先生と一緒に漢詩をやっていた仁賀保香城という人です。この仁賀保香城も漢詩人です。書は、私が見るには、どうもこの土屋先生に平尾先生は影響を受けた感が強いかなと思います。仁賀保先生の字はきれいな字でうまい字ではありませんが、芸術性というのとは違うような感じがして。この土屋先生の字はいくらか平尾先生の基になったのかな。本当はこの額は仁賀保先生が書くべきでしょうが、師匠じゃない土屋先生に書いてもらったのを飾っていたのです。ということは、土屋先生の方に影響を受けていたのかなつていう感じがします。今、この額はうちにあります。平尾先生のおうちに行くと、玄関を見上げるとこの額が飾ってありました。一時は、平尾先生に印を刻ってもらわないと特選はとれないなどと噂された時代もあつて、みんなこの『蘭盃』つていう額を仰いで見ながら平尾先生のところへ謁見した、そういう額なんです。それが回り回つて、先生の甥っ子の息子さんでしようかね、その方から、「鐵之先生が一番最後に入入りしていたお弟子さんなので、これは持つていってください」と言われ、この他にも使つていた硯とかいろいろ私が預かりました。平尾先生の残したものを守る役目になった、これが証しの作品なんですね。あけびをうちの庭にも植えて真似なんかして、憧れてやっています。平尾先生とのつながりということでご理解いただけただでしょうか。二年くらいの間でしたが、若い頃に接した、感化されたものが大きくて、今でもそういうことで影響を受けている平尾先生です。

では、ここからは私の近業として、最近の作品を説明したいと思います(図15)。これは二度目の特選の作品です。この作品を書くまでにちよつと縁がありまして青山杉雨先生のとこへ一〇年間、「弟子に

はしないよ」って言われながら通ったことがありました。その頃は大変でした。書作院にしながら謙慎に習いに行くっていうのは。うちの父がいる頃はよかったです。うちの父も、「俺がいなくなったら風当たり大変だろうな」って言って亡くなりましたが、案の定、浅香先生にずいぶん責められまして大変だったです、一〇年間。でも青山先生は非常に親切に見てくれて。一〇年目になって青山先生が病気で入院されるといいう時に、みんなの前で、「鐵之はな、こいつは俺の弟子じゃないんだ。こいつは浅香のところのだから」ってみんなの前で言ってくれて、最後に書作院に帰る手はずをしてくれました。無事一〇年間青山先生の下に習いに行つて、それでまた書作院に帰ってきました。

特選 「蘇軾詩」 吉澤鐵之



図15

それから青山先生も亡くなって、書作院の先生の下でやっています。自分たちでただ作品持ち寄っただけでは伸びないので、星弘道先生に「みんなでどっかへ見てもらいに行きませんか」っていう話をしたら、「うん、僕は古谷蒼韻先生が好きなんだよな」「そ

うですか、じゃあ」ということになって。もうその頃は古谷先生は引退していたんですが、三、四年行っていましたかね。そうして指導を受けながらも、手本を書いてもらうことはないですね。「こつちがいい、あつちがいい」っていう勉強の方向だけ教えてもらっていました。行き始めた時に、古谷先生が、「うちなんか来ても、私はもう何の役にも立たないよ」とおっしゃるんです。私も「先生、私はそういう気持ちで来てるんじゃないんです。ただ、先生の警咳に触れたくて来ているんです。そういうことは全然考えていません」とお話しして、遊びにずつと行きました。古谷先生とうちのおやじもちょうど年代が近いですから、おやじの話なんかすると、古谷先生は「お父さん、なんであんな下手な字書いてたのかね」なんて言うんですね（笑）。それは一つには「お父さんの字なんかをまねしちゃ駄目だよ」っていうことの、古谷先生なりの指導だったのかなと思うんです。この特選とった時も、古谷先生、「お父さんより格調高い字になったね」って褒めてくれたんです。うちの父とも全然違う字書いて、それが古典に根ざしているっていうことで褒めてくれたのをよく思い出しております。これ、米芾が私好きで、米芾をずつと若い頃からやっているの、最後にやはり米芾に戻ったような感じですよ。

次の作品は（図16）は二〇一四年、第一回改組新日展で会員賞を頂いた時の作品です。この前の年、初審査員で出しています。審査を終えて、陳列も一日でいただいた終えて、みんなで赤坂辺りのカラオケなんか行って、二日目の陳列で六本木的美術館へ上機嫌で歩いている途中に朝日新聞のあの記事を見て、それで崖から落とされました。そういう年の次の年です。ですから、会員になって一年目。その朝日新聞の問題があったから、作品見せちゃ駄目だとかって話があったので、



改題 新 第1回日展 (2014) 日展会員賞 災後三年五浦有感 吉澤鐵之

図16

星先生にもお見せしないで出しました。これはどういう紙に書いたかっていうと、実は銀なんです。銀の古いものなんです。古い屏風を日頃から集めていまして、それを剥がして書くのを最近はずっとやっております。昔、殿村先生が金屏風に書いていた。それから、赤羽雲庭先生が金屏風に書いたのはやはり憧れでありまして、それに負けじと。今はネット

トの時代ですから、手に入るんです。いい時代になったなと思います。それで全国から集めてはしょっちゅう剥がして書いていたそのうちの一点だったんです。これも本当にきたない紙で、「こんなもの出していいのかな。でも日展会員になったから落ちないんで、まあいいかなと」(笑)。そう思っ出て出したら、星先生から電話があつて、「会員賞になっちゃったよと」。「えっ」と思つて。ちょうどこの前の年に、黄州寒食詩巻が日本に来た時で、それを習つたりしたもので、米芾に加えて蘇東坡が入っている時だったですね。米芾だけだと単体になるんですが、蘇東坡を入れたんで、少しつながりが出たというか、山

のような形が強くなって、よかつたのかなと思つています。

見せ場としては、一番には「巖」という字で、それと「郷」です。それから、実はこれ、先ほども言つたように自作の詩なんです。この時に第三者、外部審査員という方が日展で審査に出まして、島谷先生、菅原先生、神崎先生の三人でした。菅原先生も、それから島谷先生も皆さん学者ですんで、私が漢詩を作っているっていうのを知っていたんです。この詩も読みたいなんです。それで、それも含めて評価してくれて、会員賞に選んでくれたみたいです。

この作品はこういう詩なんです(図17)。「災後三年五浦有感(さいごさんねんいづらゆうかん)」。震災の後三年目だったんですね。五浦っていうのは、茨城県の北のほうに、岡倉天心が横山大観だとかそういうた人を連れて日本美術院をつくつた、そういう名所がありまして、そこには海岸に六角堂という独特な建物があるんです。

これが震災で流されちゃつたんですよ。でも、茨城大学にその設計図がありまして、他がまだ復旧してないのに半年くらいもしてすぐそれを建て直したんです。これは天心先生の美術に対する情熱、そういうものが地元にも浸透して、復興のシンボルとして早めで復興しようということ、

「災後三年五浦有感」  
 狂浪曾侵五浦郷  
 岸頭無影水茫茫  
 如今巖上見何物  
 不屈天心六角堂

図17

茨城県でこの六角堂を建てたんです。それに日展の朝日問題を重ねてこの詩を作ったんです。詩は一番最後から作るんです。決めぜりふですよね。一番最後の文、「不屈天心六角堂（ふくつのでんしんろつかくどう）」。「天心先生が造った六角堂は不屈でますますに建った。この句ができたんで、あとはすつと出てきたんです。最初は、「狂浪曾侵五浦郷（きょうろうかうつておかすいづらのきょう）」。「震災の狂つたような浪がかつてこの五浦の郷を襲った。そして、「岸頭無影水茫々（がんとうかげなくみずぼうぼう）」。「一時は岸辺のほとりは、その六角堂の影もなく水が茫々とあるだけ。「如今巖上見何物（じよこんがんにようみるはなにものぞ）」と。半年たった今、その崖の上に見えるのは何か。それが不屈天心六角堂。そういう精神に我々も日展の書も倣って頑張りましたよっていう、気合いが入った詩ができたんで、これはいい詩ができた、気合いが入ったぞと思つて書いた一枚なんです。

狂浪曾侵五浦郷、岸頭無影水茫々、如今巖上見何物、不屈天心六角堂。こういう気持ちが入る詩ができたのと、それと紙もこの紙だったから良かったんでしようね。きれいな紙では水害に遭つた感じがしませんから（笑）。雰囲気も出てよかつたのかなと思いますが、そういうことで破格の会員賞をいただくことができました。日展の書が変わつたよって言うために、いちばん下で入つたばかりの会員にくれたのかな、とも思つたりしています。

さて、これも最近の私の作品です（図18）。これはどっちも銀紙に書いています。やはり屏風を剥がしたものです。右が一昨年読売書法展です。「風饗（ふうとう）」という、これは自作の言葉ではありませんが、韓愈という人が作った言葉です。下は難しい字ですね。上の部分は「號（ごう）」と読んで叫ぶ。下は「食」という字ですね。叫



日展 第4回日展 (2017) 齋中健成 風饗

図18



びながら食べる、むさぼるっていう字であります。ですから、風がむさぼる、風が強いという言葉です。こういう大きな字を書くのにはやはり強い言葉じゃないと力が入りませんので。「雪虐風饗（せつぎやくふうとう）」っていう言葉の中の二字をとって書きました。

それから、左は二〇一七年、改組新第四回日の日展の作品です。これも五言の絶句の作品でした。「蕭々種雨夜（しょうしょううたるしゅううのよる）」。「種（あき）」という字が異体字ですね。蕭々たる秋の雨が降っている夜。「獸坐（どくざ）」して長きをいたり。秋の夜長を一人で座っているんだけど、私は嫌いじゃないよと。なぜかっていうと、机の上には漢詩の本がたくさんあるし、それから壁の間には、麝墨（じゃぼく）の香りが満ち満ちている。書と漢詩に囲まれているから秋の夜長も全然嫌いじゃないですよ、飽きませんよと、そう



図19

いう詩を作って書いたものです。

これは(図19)書作院展に出したもので、金の屏風にそのまま書いたもの。乗って書くトボツと穴が開いちゃうものですから、井桁に組んで書くんです。大変で、ほとんど見せられないような格好で書いています(笑)。身軽じゃないと、牛若丸みたいにできないですね。この間、鈴木春朝先生が個展を開かれて屏風をいっぱい書かれていました。で、春朝先生は私

よりずっと年上で腰も痛くそれでも屏風を書かれて、「これどうやって書いたのかな、これ大変だったろうな」と思ってたね。自分も書いているから分かるんですが、大変な個展だったなと思っています。私の方がまだ少し若いんで元気にやっています。これは七言の二句でして、これも朝日問題のあとに作った詩なんです。「藏中頌不知禮(そうちゅうのせきそはれいをしらず)」。頌鼠(せきそ)、藏の中の大ネズミは、礼を知らない。何のことかなと思いますが、「莫近書齋筆墨邊(ちかづくなかれしよさいひつぼくのへん)」。これは朝日問題で官庁の人なんか分からないこの芸術の分野に口を出してきましたでしょう。それを頌鼠って表現しました。藏の中で、大蔵省とか文部省と

かああいうところで仕事されている方々は、こういう筆墨の世界には近づくな、関係ないでしょ、こつちのことはと。それをはつきり言うところとちよつといけませんので、柔らかく頌鼠っていう表現に変えました。遠く三〇〇年前の『詩経』に頌鼠っていうのがあります。大ネズミがまたうちの蔵の米を食べちゃったっていう詩があるんです。それはネズミじゃないんですよ。お役人様がまた高い税金取り上げていっちゃった。そういう時に頌鼠っていつている。それをわざと使って、暗にネズミのような人はここには近づかないでくださいよっていうのを書いた詩文です。

それから、これは(図20)お世話になった古谷先生が亡くなられた時にふと作った詩文です。「嗚乎(ああ)。これ口偏があってもなくても同じで、口偏あると書きづらいで取っちゃいました。「嗚乎京洛老書痴(ああ、きょうらくのろうしよち)」。『書痴』っていう言葉はなかったんですが、詩を作る「詩痴」は熟語にあったんで書痴というのもあり得るだろうなと思つて造語しました。私の漢詩の石川忠久先生にも、「うん、大丈夫だ」ってご了解取りまして。「京洛」というのは京都のことですね。ああ、



図20

京都の年とった書道気違いのおじいさん。これは褒めて言っているんですよ(笑)。「筆折墨枯何處之(ふでおれすみかれていづくにかいかん)」。あれほど書が好きだった、書の話に夢中になっていた、あれほど好きだったのに、筆が折れ、墨も枯れて、もう字が書けなくなっちゃって、どこへ行っちゃったのかな、あの世に行かれたのかな。「知彼胥中有遺恨(しるかのきょうちゅういこんあるを)」。先生は、本當は書道界を良くしようと思つてやったことがみんな裏目に出て、最後にこんなことになつちやつて本當に残念だったろうな。遺恨いっぱいだっただろうな。「仰天吞淚斷腸時(てんをおおきなみだをのむだんちようのとき)」。ああ、先生無念だったろうな、私も思つていますよつて、そういう詩を作つて先生に捧げました。

これを西嶋先生が見てくれて、いや、弟子の詩を読んで「俺も胸がすつきりしたよ」と言つてくれました。言いたいことを漢詩で作つてくれてすつきりしたつて、書作院の五〇〇人くらいのパーティーの席で褒めてくれました、ありがたかったです。

それから、これは最近こういう遊びをしています(図21)。どうも



図21

第47回「日本の書展」現代書壇代表



図22

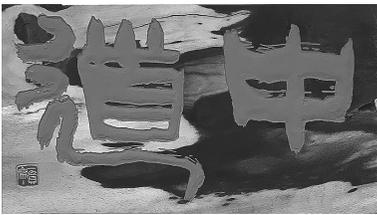


図23

普通に紙に書いたんでは作品ができなくなつてしまひまして、これ木に彫つたものです。独学で刻字をやっています。これ、右側の字はにすいの「氷」という字です。「氷魂(ひょうこん)」つて書いています。氷の魂つて何かというと、梅の花びらのことです。梅のはなびらは、雪のように真つ白いでしょ。凍つた雪のように白いので、氷の魂つていうのは梅の花びらのこと、あるいは、清らかな気持ちのこと。氷魂、いい言葉なんでこれを彫つて出しました。それから、これは(図22)去年の日本の書展に出したもので、「寒林」、禪語ですね。寒々しい林。これはかえでの木ですね。木の木目をなるだけ出してこうと思つて、楽しみでやっています。面白いですよ、いろんな木があつて。これはクロマキの木なんです(図23)。こういうふうにくろまきの黒い墨流しのようなもやが生まれて、何色でやつたらいいかなと思つて、これは彫つてから朱で塗りました。どうでしょう。立体書道のようになつてきて方向がだいぶ違つてきたかもしれないですが、小さい作品はこういうふうにく字をやつて楽しんでいきます。結構面白がられて評判よろしいです。

それから去年、実はうちの父の三十三回忌だったもんですから、三月に兄弟でうちのおやじの回顧展をしてあげました(図24)。作品を広げていきましたら、ずいぶん絵が多くて。元々は画家になろう



図24

と思っていたうちの父だったんで、晩年は特に病気が多くなって、自分の命がどのくらいあるか分からないようになってからは、中央の書道界に行かずにひたすら絵を描いていたんです。必死で描いていたんです。それが山のように残っています。それを昨年一堂に広げて、図録も作ってあげました。やっとこれでうちの父への親孝行ができたかなと思っっています。ちょうど三人とも、日展も卒業できたところだったんで、うちのおやじにいい報告ができたかなと思っっています。

右が河童の絵(図25)、小川芋銭という牛久に住んでいた画家に私淑していたんで、河童を描いたりしています。なぜ途中からまた絵を描くようになったかっていうと、清水公照先生との出会いがあったんですよ。東大寺の別当を二回務めた清水公照先生ですが、この方は講

演会なんかで水戸へお呼びし、お酒を飲まれて、脇の

部屋に下敷きと紙を敷いて「先生、用意してあるんですが」なんて言うと、すっと

自由に描くんですね。それを見ていて、「こんなふうなら俺もできるかもしれない」

って言って描き出したのが、火のついた始まりでした。

ですから、清水公照先生との出会いがなかったらこれほどに絵を描かなかったかもしれないですね。公照先生



図25

に触発されていろんなものを描いている。これは

うちの雑誌を発行している書魁社というところ

です(図26)。昨年、うち

の父の顕彰碑を建ててあげたんです。今どき顕彰

碑を建ててもらえる人は

なかなかいないでしょ。

西川先生でも青山先生で

も日比野先生でも建っ

ていませんよ。それを建て

たんですよ。偉いでしょ

(笑)。「鉄石先生顕

彰之碑(てつせきせんせい

のひ)」(図27)。う

ちの石川先生に撰

文をしてもらいま

した。私が日本語で

書いて、それを先生

に漢文に訳しても

らう。私が張猛龍碑

を基にした字で書いてうちの玄関に



図26



図27



建てたんですが、近所の人が何が建ったのかびっくりしてもうみんな立ち止まっていく(笑)。そういうことで親孝行をやつとできた。石川先生もお年で、「もうこれで最後かな。こういうの作れるのは」と言っていました。「もう顕彰文とかを漢文で作れる人が世の中いなくなってしまうんだよ」と石川先生がおっしゃっています。最後の最後で間に合ったかなと思っております。われわれが朽ち果ててもこの石碑は残りますので、やはり石は偉大ですよ。

だいぶ時間がたってしまったのですが、西村先生からのリクエストで、映画の『桜田門外ノ変』の話してくれていうふうに言われて、真面目な話だけで終わろうと思ったのですが、実は映画に出演したことがあるんですよ。右側で「尊攘」と書いているのが私です(図28)。左側は北大路欣也さんでして、共演したんですね(笑)。

『桜田門外ノ変』という映画、茨城で作ったんですよ。テロの映画だから反対もあったのですが、そういう話をしている時に私、漢詩をしています。たし、水戸のことやなんかもやっていましたので、ぜひ題字を書いてくれという話が最初来たんです。「はい、いいですよ、字を書くのはいいですよ」っ



図28

て。その後、映画はずいぶん進んでいるんですが、一向に題字の話が来ないんですよ。そこで、水戸市長と親しかったんで市長に、「どうなっているんですか、こういう話あったんだけど」と聞いてみたら、「先生、題字はともかく出演してくれないかという話が来ています」って言うんですよ(笑)。実は、弘道館に行くのと立派な松延年っていう人が書いた「尊攘」がありまして、それを書いたところの映像を撮りたいていうわけ。「そうですか」って渋々引き受けました。それから現場に呼ばれて審査されて、「次の方」松延年役の吉澤です「みたいに。「この人はお医者さんの役だからちようど頭を丸めたほうがいいですね、二分くらいに頭刈り上げて来てください」なんて言われて(笑)。それで普段より短めに刈り上げて。「眼鏡はちよつとまずいのでコンパクトしてきてください」って言われて、コンパクトやったことないんですが、しょうがなくコンパクト店に行ったんだけど、目が小さくて入らなくて(笑)。それから、いつ書くのかなと思っていましたら、直前に「明日撮影します」というわけで、弘道館で撮影しました。ですから、紙も折れ目があるでしょ。もつと早くに言ってくれば用意したのに。映画って本当にバタバタ作るんですよ。

当日、まず服の丈をずいぶん詰めてもらって(笑)。支度部屋で隣に北大路欣也さんがいて、「どうも」「あ、どうも」「先生、字を書かれるの?」「はい」「そうなの」って。それで、撮影になりましたら、窓際の机で北大路さんが「尊攘」って半紙に書くところから始まったんです。見ていたら書き順は違うし下手なんですよね(笑)。まあいいかなと思っただけなんです。カメラが寄ってくるんですよ。で、ちよつと止めて、「すいません、監督ちよつと待ってください、斉昭公は字がうまくて有名だったんで、それ手本を書きますから、ちよつ

と習ってもらって：」って。北大路さんが「先生が書くんじゃないの、やってくれんじゃないの」なんて言ったら、「いや、袖が違いますから駄目です」なんて言われて、北大路さんが書くことになったんです。それでまず手本を書いてあげて。北大路さん、一生懸命、四、五枚習ったんですが、上手くなってるね。やはり何事も芸事やっている人は、ちよつとやると上手くなるんだなと思いましたね。上手かった。それで最初に書いたのと、それから指導前、指導後の作品ももらった。「ちよつともらつときますよ」って。そうしたら北大路さんが「先生、教材に使うんだらう」って（笑）。「それはもちろんですよ」って言いながらもらつてきて、置いてあります。それも今日持つてくればよかったですよね。

そういうことで、北大路さんの前で書かせてもらって、冒頭の場面ですがね。一応題字もそのあと依頼がきて書きました。ですから、エンドロールには出演者と題字で二つ名前が出ています。もし機会がありましたらご覧になっていただきたいと思います。

それから、これは漢詩集（図29）。石川先生のとこへお世話になりますして、二三年か二四年になります、その間に三冊、漢詩集を出させていただきました。最近出したのは一番左で、先ほどの会員賞の作品や解説を載せています。もし欲しいという方は言っていただ



図29

ければ在庫はいくらでもありますので。ちよつど一時間になりました。まとめとしまして、昭和から平成とずつと書道界は隆盛を極めてきましたが、最近徐々に少子化、高齢化、それからいろんな多様な文化がありますんで、若い人がこういった芸事から離れつつあると思いますね。これまで、一時は数の重みで書道界をずっと引つ張ってきましたが、これからはこの平尾先生風の文人のような、深い味のある芸事を追求していくことが、若い人を取り込むには大事なんじゃないかと思えます。若い人は数なんかでは寄ってきてくれません。漢詩文であったり、道具であったり、書というのはすごく広くて深いものですから、若い人たちに、この書の本当の素晴らしさを知ってもらうことが、書道界のこれからの本当の仕事じゃないかなと思っております。太玄会の皆さんは、この平尾先生の高尚な文人の気質を元々、会として持っているわけですから、ぜひその文人的なものをさらに追求してくださるようお願いいたします、私の拙いご挨拶とさせていただきます。長いことご清聴ありがとうございました。



## 第61回太玄会書展 役員挨拶、祝辞

### ◎授賞式挨拶

理事長 宮負 丁香

入賞、入選された皆さん、本当におめでとうございます。太玄会は昨年60周年記念を迎えました。干支で言いますと一巡りして今年は第1回目を迎えたといっても良いかと思えます。また、昨年の台風15号、19号で災害に遭われた方がこの会場の中にもいらっしやるかと思えます。そういうこともあり今年は出品点数も減少するのではないかと心配いたしました。今年度から高校生の部を開設したこともあり、昨年より数十点の出品増となりました。これも皆様のご協力の賜物と感謝しております。本当にありがとうございます。

太玄会は、15の団体から構成されています。この15の団体がそれぞれの表現と考えをお持ちで今回も作品が展示されています。このような展覧会は全国においてもほとんど見ることはないと思えます。展覧会は本日で閉幕となりましたが、そこでこれからのことですが、それぞれの団体にはそれぞれに良いところがあると思えますが、自分の団体だけではなかなか良いところが分からないともあります。そこで他団体の良いところを見ていただいてこれからの作品制作に役立てていただければ太玄会の作品はもっと良くなるのではないかと思えます。これから各団体に帰りましたら、こういう作品があった、こういう

うふうにしてみると良いのではという話をされて、来年度は昨年よりさらに良くなったと言われる作品を出品して頂ければ幸いに存じます。本日は本当におめでとうござります。

### ◎祝賀会挨拶

太玄会会長 垣内 楊石

本日はご来賓の皆様には大変ご多用のところ、お集まりいただき本当にありがとうございます。心より厚く御礼を申し上げます。この太玄会は近年、内容も充実してきていると自負しているところでございますが、これからもご来賓の皆様からのご意見を賜り、これからも精進して参りますのでご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

万葉集ふたののおきみに道祖みちすぢ王の「新しき年のはじめに思うどちい群れてをれば嬉しくもあるか」という歌がございます。新しい年の初めに大勢の仲間や気の合う友が集まることは何て嬉しいことだろうという歌ですが、本日の祝賀会は正にこの歌を勝る集いかと思えます。これも本日お集まりのご来賓の皆様のお陰でありますことを心より感謝申し上げます。本日は本当にありがとうございます。

### ◎祝賀会祝辞

日展理事 全国書美術振興会理事長 高木 聖 雨 様

只今ご紹介を頂きました高木聖雨でございます。まずは第61回太玄会書展の開催、誠におめでとうござります。また、本日も受賞された

皆様、本当におめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。第61回の開催ということは、干支で言いますとちよūd一回りして新たな出発点に立ったと考えて良いかと思ひます。展覧会を拝見させていただきます、新たな一歩をスタートに相応しい迫力のある作品が沢山並んでおり、観る側からしますと非常に楽しく拝見させて頂きました。

現在、書美術振興会の理事長を仰せつかっていますが、読売、毎日、産経の各新聞社の全てにこの太玄会は関わっていらつしやり、これは誠に貴重な団体だと思ひつています。そういった意味で、この太玄会は3社の系統が集い、新しい表現を求めてこれれ、変化してきたのではないかと思ひます。本日、作品を拝見していても、それぞれの会派のイムズを守りながらも新しい表現を求めていることをつくづく感じました。太玄会が、これからも切磋琢磨され、より高度な書を追究されますことを心より期待しております。

また、謙慎書道会の理事長としてご挨拶をさせていただきますが、今年で創立85周年を迎えますが、太玄会が創立61年で約20年の差がございますが、関わりのあつた先人のお歴々の先生方を見てくださいと、この2つの会は同根であると言ひます。そういう意味では、謙慎書道会と太玄会は兄弟のようなものであります。太玄会では梅原清山先生が名誉顧問でいらつしやいますが、青山杉雨先生のお弟子さんでありながら、太玄会でご活躍されています。西村東軒先生も副会長でいらつしやいます。今後も謙慎書道会と太玄会はお互いに友好を結び、切磋琢磨しながらこの書道界が盛んになるように頑張つていきたいと思ひつています。また、太玄会には猗園文会の先生方もいらつしやいます。そういった意味でも繰り返しとなりますが、謙慎書道会と太玄会の縁

の深さについて皆様にもご理解いただけたことと思ひます。是非、これからもこの2つの会派が力を合せて書道界を盛り上げていきたいと思ひますので、よろしくご指導のほどお願い申し上げます。本日は本当におめでとうございました。

### ◎祝賀会閉会の辞

太玄会副会長 西村東軒

本日はご受賞された皆様本当におめでとうございました。どうかこれからも太玄会のため、より精進されて良い作品を書いていただけらと思ひつています。また、先程来から高木聖雨先生を始め、ご来賓の皆様からこの太玄会に対して過分なる励ましの言葉を頂きました。私はそのお言葉を聞いてとても緊張いたしました。今の太玄会ではいけない、もっと飛躍しなければいけないと。そのためには15団体がさらに団結して精進していく心構えでなければいけないと改めて感じました。ご来賓の皆様、本日はありがとうございます。これからも太玄会は頑張りますので、今後共ご支援ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。本日は本当ありがとうございます。

## 第61回太玄会書展

### 謝 辞

第61回太玄会書展において、受賞を頂きありがとうございます。受賞できたのも先生方、先輩方、書友の皆様のおかげと心より感謝申し上げます。令和元年という新しいスタートの年にこのような素晴らしい賞を頂けたこと、生涯を通じて忘れることのできない年になりそうです。この賞を励みに日々精進していきたいと思っておりますので、今後とも先生方のご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。

15の団体からなる太玄会の益々のご発展と繁栄を祈念してお礼の言葉とさせていただきます。

令和二年一月二十六日

受賞者代表 書星会 宮本 芳秀



授賞式風景



謝辞 宮本芳秀氏



授賞式風景



## 令和2年度 総会（書面開催）

今年1月、WHOが新型コロナウイルスを確認し、国際的な緊急事態を宣言しました。2月27日に首相が全国全ての小中学校に臨時休業要請の考えを発表。3月24日には東京五輪、パラリンピックの1年程度の延期が決まりました。また、4月7日、7都府県に緊急事態宣言が発令され、同月16日、更に7都府県に加え、6道府県の13都道府県は特定警戒都道府県と位置付けられました。

このような状況の中、太玄会では4月21日開催予定の理事会及び総会を中止とし、書面開催に変更しました。その後、15団体全てから承認を頂き、令和元年度の事業報告、会計報告、並びに令和2年度事業計画案、会計案、役員構成、昇格者等が承認されました。

## 令和元年度 事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
31・4・21	運営委員会 理事会 令和元年度定期総会	役員改選の確認 総会提出議案の検討 第61回太玄会書展 （併催第4回学生選抜展） 当番審査員決定方法 日程その他の確認 事業報告・会計決算報告 事業計画・予算案審議・その他 懇親会	上野精養軒
1・5・8	事務局・部長会議 運営委員会	創立60周年記念祝賀会最終確認等 第61回太玄会書展 （併催第4回学生選抜展） その他	上野精養軒
5・16	祝賀会打ち合わせ 太玄会創立60周年 記念祝賀会	来賓63名、会員428名 計49名出席 創立60周年記念祝賀会総括 第61回太玄会書展 （併催第4回学生選抜展） その他	ザ・プリンス パークタワー東京
6・9	運営委員会	第61回太玄会書展 （併催第4回学生選抜展） 企画詳細の確認	上野精養軒
7・10	事務局・部長会議 運営委員会	書類搬入 第61回太玄会書展 （併催第4回学生選抜展） 企画詳細の周知徹底 忘年懇親会	上野精養軒
10・9	搬出入部 運営委員会 理事会	作品搬入 審査（会員賞選考） 審査（準会員・公募） 陳列 初日 特別講演会 （吉澤鐵之先生・私と書）	東京都美術館
12・1	第61回太玄会書展 （併催第4回学生選抜展） 1・3021・171・3026 9・3021・171・3026 席上揮毫・解説会・ビデオ放映 一般出品数 832点 学生出品数 479点 総出品数 1311点 （第60回展 128点）	最終日 授賞式、祝賀懇親会 作品搬出 第61回太玄会書展総括 定期総会提出議題の検討 令和元年度会計監査	東京都美術館 上野精養軒 東京都美術館
1・26	運営委員会 事務局・部長会議	令和2年度定期総会提出 議題の確認 事業報告・会計決算報告・監査報告 事業計画案・予算案審議 その他 懇親会（中止）	上野精養軒
1・27	会計監査（中止）		上野精養軒
3・14	運営委員会（中止） 令和2年度定期総会（中止）		上野精養軒
4・1	理事会		上野精養軒
4・19	令和2年度定期総会（中止）		上野精養軒

# 第61回太玄会書展(併催第4回学生選抜展) 出品状況

☆総出品点数 1,311点

21	名誉顧問 常任顧問 董事 運営委員
7	総理事務 監事
66	実理事務 委員
120	行事
108	審査員
106	委員
190	準会員
214	公募
479	学生

# 第61回太玄会書展入賞状況

4	太玄大賞
4	太玄賞
3	全日本書道連盟賞
5	特別賞
5	奨励賞
9	会員新人賞
27	推選
58	準推選
31	特選
97	準特選
104	入選
461	学生部入選

※入場者数 5,266名

# 事務局各部活動状況報告

◎事務局 (担当 副事務局長 江原見山 大場大幹 下谷蘊雪 飛田冲曠)

- 31 4 定期総会実施、役割分担の打ち合わせ
- 1 6 令和元年度会員名簿発行、創立60周年記念祝賀会実施
- 7 第61回太玄会書展実施に向けての打ち合わせ

10 第61回太玄会書展詳細の検討

運営委員会、理事会、忘年懇親会への通知

7 11 牧野商会及び空間堂への第61回太玄会書展の依頼と打ち合わせ

12 本展会場打合せ 会場当番の計画と依頼 総会会場打ち合わせ

2 1 第61回太玄会書展の開催 吉澤鐵之先生に係る講演会の実施

2 令和2年度定期総会のお知らせ

3 第61回太玄会書展図録の来賓等各位への送付

※年間に開催される運営委員会、理事会、部長会、総会等会議の連絡事務

※報道関係(本展作品)(年鑑、広告)掲載に係る業務

※住所変更、退会届等受付処理業務

※本展の後援等に係る外部団体との連絡・折衝

※東京都美術館平成29年度公募団体展展示室の借館に伴う、書

展実施年度の詳細打合わせ等

申請書の作成、提出、承認

(平成29年4月～令和4年3月)の5年間

太玄会32会期 1月19日～1月26日

◎会計部 (担当 下谷蘊雪)

31 4 平成30年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

総会に向けて平成30年度の決算書、並びに令和元年度の予算

案作成

平成30年度会計監査実施

令和元年度総会 決算書、予算案報告、総会受付補助  
各社中へ令和元年度会費納入に関する書類並びに依頼書を送付

1 令和元年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼

7 会費領収書を各社中へ送付

10 第61回太玄会書展に関して各部の行動予定の把握 行動費、経費の算出、資金の準備

第61回太玄会書展書類搬入時の準備

12 第61回太玄会書展の予算案作成、運営委員会に提示

令和元年度理事会忘年会 会費納入受付 公募出品料集計確認

第61回太玄会書展必要経費準備

2 1 第61回太玄会書展審査会に於ける手当及び経費支払業務

第61回太玄会書展授賞式、授賞懇親会の諸経費準備、支払

業務

2 第61回太玄会書展の収支報告書作成

3 令和元年度会計監査に向けて元帳、仕訳帳の入力整理

令和元年度決算書、令和2年度予算案作成

令和2年度総会準備

◎事業部 (担当 路野祐涯)

1 5 アオキに会員名札・賞札を発注

6 風雅プランニングへ出品規定など依頼

7 風雅プランニングへポスター・ハガキなど全書類に関して送る、校正、初出品票を各社中へ発送

8 真仙会・九龍社・鳥跡会三社中の会員名札、及び役職札、事務用品などの確認と整理

風雅プランニングより確認用の出品規定・出品票届く

9 出品規定・出品票を各社中へ、又個人宛を風雅プランニングに発送依頼

賞状・入選・学生賞状を発注

10 風雅プランニングから各社中、各業者へ書類発送 杉本先生

に賞状発送

表具店へ側表の張り方確認

2 1 東京都美術館に備品搬入

各社中の役職札の手配

備品の整理

賞札の整理

精養軒に賞状、褒賞部依頼品など搬入 年間を通じて封筒は各先生の依頼により郵送

◎広報部 (担当 荒井湧山)

31 4 総会、懇親会(写真撮影、会場録音) 於…上野精養軒

1 6 創立60周年記念祝賀会(会場撮影、録画、音源録音) 於…ザ・プリンスパークタワー東京

会報第75号の編集 会報原稿を風雅プランニングへ原稿依頼  
校正（2回）

8 会報75号の発行

12 理事会、忘年会（写真撮影、音源録音）於…上野精養軒

2 1 第61回太玄会書展 審査（写真撮影等）於…東京都美術館

第61回太玄会書展 陳列（写真撮影）於…東京都美術館

第61回太玄会書展（会場風景撮影）於…東京都美術館

第61回太玄会書展 授賞式、祝賀会（会場風景撮影、音源録音）於…上野精養軒

原稿依頼

・（会長）石川流芳先生、（理事長）宮負丁香先生、（事務局長）

小出聖州先生

・（各社中イベント紹介）各団体事務局担当へ依頼

・吉澤鐵之先生記念講演 原稿起こし業者依頼

### ◎渉外接待部（担当 石井蕙園）

1 10 第61回太玄会書展案内状発送の為、各団体に住所シールを申

請（読売・毎日・産経）

祝賀会招待状の文面を作成し、風雅プランニングに印刷を依頼

11 住所シールを作成し、祝賀会招待状を発送（友好団体関係・

報道関係・業者関係 60名）

案内状を発送 1,200枚

12 祝賀会来賓者の最終確認

2 1 祝賀会来賓者の席次表、席札、もぎりを作成

席次表、席札の設置を精養軒に依頼

祝賀会来賓者の受付

### ◎図録部（担当 小林碧桃）

第61回太玄会書展作品集

1 10 図録に係る基本方針の作成

2 1 作品撮影 426点 風雅プランニング

（審査会員以上322、会員受賞者19、準会員受賞者85）

編集 風雅プランニング

2 一回目、二回目の校正

発行部数と発送先の確認

図録発行

各社中事務担当者宛発送（風雅プランニング）

### ◎搬出入部（担当 山口香葉）

1 10 書類搬入案内書を各社中事務担当者に発送

（会計部より受領の払込取扱票同封）

招集通知書を搬出入部員に発送

（書類搬入日・作品搬入日の事務作業の説明書）

12 書類搬入日 事務の実施

書類搬入の受付

社中持参の出品目録等の書類集約

社中別出品者数表の全体表作成

出品者数を理事会に報告

受付書類を担当部長に引き継ぐ

2 1 作品搬入日 事務の実施

作品搬入の受付

搬入数の確認・確定（表装店8社より持ち込み）

役職別・社中別数の確認（社中別出品者数表参照）

出品目録・資格別作品出品数表・社中別出品数表の確定

事務局長に報告後、審査事務部長に引き継ぐ

作品搬出日 立会の実施

作品搬出の受付

搬出数の確認・立会（表装店8社の引き取り）

◎審査事務部（担当 山村鳳羽）

1 12 第61回太玄会書展の書類搬入確認（12／1）

審査事務部処理について打ち合わせ

2 1 第61回太玄会書展審査事務部打ち合わせ、役割分担説明（1／7）

審査手順、作品配置、成績処理について打ち合わせ

作品 832点確認 作品配置

審査場作成 出品者目録校正

（入賞・入選者）通知ハガキ準備

審査方法打ち合わせ、役割分担確認（1／8）

風雅プランニングと打ち合わせ

会員賞選考委員による審査

会員新人賞の選考審査

特別賞、奨励賞の選考審査

太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査

太玄大賞の選考審査

入賞者代表謝辞選出

高校生の部選考審査

選考委員及び当番審査員による審査（1／9）

推選、準推選、特選、準特選、入選の選考審査

選考委員及び当番審査員集合写真撮影

（入賞・入選者）通知ハガキ作成、発送

作品管理、成績名簿作成

褒賞部へ連絡

◎陳列部（担当 伊藤慈恩）

1 11 各社中事務担当者に陳列人員名簿の依頼書類を送付

12 搬出入部より社中別出品者名簿と準会員、公募の名札を受け

取り出品者数の確認

牧野商会に出品点数（832点）を連絡し見積もりを依頼

各社中の準会員、公募の名札の確認

2 1 副部長、委員に関係書類を送付

陳列原案を作成

牧野商会担当者、副部長と打ち合わせ

学生部の作品点数の確認

陳列日 陳列人数65名 15時陳列終了

最終日 15時会期終了後、名札等の取り外しと整理

◎褒賞部 (担当 小泉興起)

1 12 精養軒担当者との打ち合わせ (12/1)

部員全員での打ち合わせ (12/1)

書類の作成・整理・確認

リボン・事務用品の確認と補充

松下徽章へ賞品のメダル発注

賞状入れの筒発注

事業部へ賞状の発送依頼 (揮毫者宛)

2 1 審査終了後、各社中へ受賞代表者申告用紙を配布、集約

(1/9)

呼名簿の依頼 (1/9)

代表者名簿の作成

式次第を精養軒に依頼

賞状の揮毫、確認

会場案内図・席次表作成

賞状・賞品等各社中へ発送 (1/26)

会場設営 (1/26)

授賞式運営 (1/26)

◎祝賀会部 (担当 大河原由佳)

1 11 各社中の事務担当者に依頼書 (祝賀会出席者希望数・リボン

送付先住所氏名)

会費振込用紙を送付 (11/10)

全員着席形式、追加当日受付有り

12 精養軒と打ち合わせ (11/12)

当日までの準備

2 1 出席人数把握

看板 (舞台上の確認)

次第の確認

書類作成

リボン確認

案内表示作成

委員に書類送付 (1/22)

各社中へ出席者数リボンを指定先に送付 (1/8)

精養軒と最終打ち合わせ (1/15)

1月26日 部長・副部長・委員集合、打ち合わせ

出席者数

申込み 217名

来賓 40名

追加当日申込み 45名

合計 302名

◎学 生 部 (担当 鳥越新芽)

- 1 8 第4回学生選抜展小中学生の部出品要項他 書類を13社中宛 発送
- 10 第4回学生選抜展高校生の部出品要項、名札他 書類を13社 中宛発送
- 12 書類搬入、出品一覧表、名札、表具料振込コピー受付  
学年別出品点数確認  
高(90点)、中(122点)、小(267点) 計479点  
風雅プランニングに入賞・入選者名一覧の発注
- 2 1 搬入日 作品点数確認 学年別仕分け  
陳列日 小・中学生の部、学年別に3段掛けで展示  
23・24室使用
- 証発送 各社中宛賞状・入選証発送、入賞・入選者名一覧仕 分け  
発送は褒賞部に依頼  
最終日 15時より軸をおろす

令和2年度 事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
2・4・19	第1回運営委員会(中止) 第1回理事会(中止)	一部役員改選の確認 令和元年度事業報告 決算報告、監査報告 令和2年度事業計画案及び 予算案の審議、その他	上野精養軒
5・13	第1回事務局・部長会議 (中止)	懇親会(中止)	上野精養軒
5・19	第2回運営委員会(中止)	第62回太玄会書展 (併催第5回学生選抜展)	上野精養軒
7・8	第3回運営委員会	第62回太玄会書展 (併催第5回学生選抜展) 一般社団法人化について	上野精養軒
10・7	第2回事務局・部長会議	第62回太玄会書展 (併催第5回学生選抜展関係)	上野精養軒
12・13	搬入日 第2回理事会 第2回運営委員会	第62回展書類搬入 第62回太玄会書展 (併催第5回学生選抜展) 一般社団法人化について 忘年懇親会	上野精養軒
3・1・8 1・1・9 1・10 1・20 1・26 1・30 1・17 1・30	第62回太玄会書展 (併催第5回学生選抜展)	作品搬入 審査(会員賞選考) 審査(準会員・公募)	東京都美術館
1・27 1・26 1・24	第4回運営委員会	初日 学生選抜展(高校生の部) 授賞式及び昼食会 授賞式、祝賀懇親会	上野精養軒 上野精養軒 東京都美術館
1・19 1・20 1・23	第5回運営委員会	作品搬出	上野精養軒
3・13	第6回運営委員会 第3回事務局・部長会議	第62回太玄会書展総括 (併催第5回学生選抜展) 一般社団法人化について	上野精養軒
4・18	会計監査 令和3年度定期総会		上野精養軒

# 令和2年度 役員構成

名誉顧問	梅原 清山
常任顧問	福田 丞洲 田中 鳳柳 笠原 聖雲
董事	垣内 楊石 鈴木 暎華 瀧沢 曲峰 小原 天簫
会長	伊東 玲翠 高橋 心行
副会長	石川 流芳 石川 流芳 露野 雅宣
理事長	西村 東軒
理事	宮負 丁香
副理事長	金丸 鬼山 伊場 英白
事務局長	小出 聖州
副事務局長	江原 見山 大場 大幹 下谷 蘓雪
飛田 冲曠	
運営委員	石川 流芳 西村 東軒 露野 雅宣
宮負 丁香	金丸 鬼山 伊場 英白
小出 聖州	江原 見山 大場 大幹
下谷 蘓雪	飛田 冲曠 海野 十方
理事・総務	石島 廻山 遠藤 有翠 木全 珠香
植木 蒼穹	鎌田 龍祥
中田 珪川	中尾 勝子

監事	小林 紫雲 志村 恵風
理事・実行委員	會田春燕 足達紫鳳 新井清玉 荒井湧山
石井蕙園	石井珠翠 石坂翔鳳 伊藤慈恩
菴澤幸楓	植村暁恵 江原紫光 大河原由佳
大窪昇鶴	大森鳳城 笠井津仙 片倉道子
亀ヶ谷深翠	川端敏江 倉持栄秋 黒川白嶺
黒田桂泉	小泉香園 小泉興起 小林碧桃
小山泰雲	近藤寿泉 笹井芝雪 佐々木恵陽
佐々木幸葉	佐藤龍聖 嶋田白染 清水美代子
須田瑞兆	清宮白鷺 返町恵風 高山爽快
滝澤聖華	田中恵康 田中柳惲 田村昇鶴
柘植金鶏	富山虎跑 鳥越新芽 中元泰乘
並木金紫	南部碧章 西澤厚子 西谷香峰
橋本春溪	長谷川溪華 長谷川香壽 露野祐涯
吹原草扇	藤岡悠苑 細谷芳月 堀越壽晶
前川郷石	増永楊蘭 南 溪石 三根揚輝
宮嶋吾風	村松鳳襟 山口香葉 山崎翠嵐
山村鳳羽	山本白鷗
理事	青木芳濤 浅香麗芳 池田紅華 石井瑗泉
石井滂翠	石黒自耕 板垣芳蘭 板倉建昇

市川志玉	伊藤氣雪	伊藤紫粹	伊藤桐花
伊藤遙山	岩井壹龍	宇野静香	馬居李帆
遠藤鈴響	大木暁峰	大竹伯燿	太田芳琴
大畑晃翠	岡崎翠晃	小田堤翠	小野敏之
垣内玉華	柏原桂雪	勝又慶竹	加藤径石
嘉門瑤泉	川上白鳳	川谷淳子	川津恵鮮
川本景月	菊野白濤	窪田好華	久保田芳仙
倉田桂華	栗田伯陽	黒川虚白	小林嶺風
小宮柳岱	小山君代	齋藤清華	櫻井玉苑
佐藤北峰	下島東僊	下原春美	下村清子
白崎信園	末永照英	杉浦華英	杉本英華
杉本雅峰	鈴木惠理	鈴木春畦	関根暁香
高橋興舉	高橋心華	田上洋香	宝田暁蓮
竹内游月	田中華苑	田中盛観	田辺心苑
田村麦浪	坪川九翠	内藤秋麗	中垣郁芳
中西甫子	中森茶月	西岡虹舟	新田白楊
長谷川流祥	花澤雙鴻	林 幸恵	林 韶舞
林 賢子	羽山多望	原田彩翠	弘田長風
露野研涯	福田節子	藤田冠山	古谷善子
星野遙涯	細田耕仙	堀 桃泉	本間杏雪
真岸京湖	松尾蘭月	松口翠葉	松田爽花
松橋多恵	御園生溪風	三岡翠風	皆川蘭香

## 第61回太玄会書展 入賞または社中の推選による昇格者

第61回太玄会書展入賞による理事・実行委員へ4名

宮本芳秀 望月擁山 山崎洋子 吉田恵子

第61回太玄会書展入賞による理事へ7名

小林桂葉 鈴木竹園 田辺水月 谷本藍泉 田村史子 時田大祥  
日置雅有

特別昇格により理事に昇格された方1名

垣内蘭畦

審査会員へ8名

荒井珠鶴 尾崎清爽 京増瑞葩 齋藤廣遙 中川蘭葉 中山高風  
芳賀光珠 龍頭溪仙

蓑 青松 宮原真玄 三好凌香 村上航舟  
山内紀隆 山口杏園 山口古艸 山崎寛齋  
山崎琇園 山地暁翠 山下玉水 山田光倫  
山田騰沸 山本皓月 湯浅瑞雲 横山恵華  
吉田景雲 吉村清志 渡辺玲雲

会員へ29名

相木小百合 泉 桐艶 大熊恵玉 小川美笙 小澤雲峰 垣内一楊  
 上西秀峰 沓澤絵梨 小暮兆琳 小菅啓子 小松崎紫流 猿田紫陽  
 下間佳璋 鈴木光鶴 鈴木智子 竹内翠紗 土屋爽流 手島萬峰  
 中元玉蘭 藤田寿仙 藤田晶洋 細測金杏 増田澄靖 松浦桃苑  
 松永愛泉 宮本恵玉 茂木朱櫻 守田禎香 山岸信彦

準会員へ33名

阿部 寛 荒井蓬月 石井鏡子 石田正道 稲生妙子 井堀咲麗子  
 植松走風 大熊 勇 大塚美代子 大場青峰 岡島寿石 小澤奈穂美  
 小野翠香 片倉 幸 勝畑喜市郎 金井薫姚 川端紫雲 窪田静花  
 小出厚隆 斉藤光天 笹木瑞希 志村 恵 杉山雅子 鈴木麻美  
 藺田紫苑 竹本萩嶺 玉井香敬 寺崎酔炎 長谷川洸春 本間直人  
 増田青溪 松沢上清 米倉喜美代

令和2年 事務局構成

事務局長 小出 聖州

副事務局長 江原 見山 大場 大幹

下谷 蕪雪 飛田 冲曠

会計部 山口 香葉

事業部 露野 祐涯

広報部 荒井 湧山

渉外接待部 石井 蕙園

図録部 小林 碧桃

搬出入部 江原 紫光

審査事務部 山村 鳳羽

陳列部 伊藤 慈恩

褒賞部 小泉 興起

祝賀会部 大河原 由佳

学生会部 鳥越 新芽

# 太玄会所属団体のこの一年の活動（平成30年10月～令和2年3月）

## 書星会

### 第67回書星展

会期 令和元年11月10日～11月16日(土)

会場 東京都美術館

代表者 宮負 丁香



芸術の秋である十一月の開催を三年行ってきたと、以前の八月の猛暑に行っていたことが少々懐かしくも感じられる。

作品数は七六七点と様々なサイズ形式のものが会場を埋め、十三名の作品解説会と四名の席上揮毫のイベント効果もあり、三千名以上の入場者数となった。



## 菅菰会

### 第56回菅菰書展 併催 全国学生展

会期 令和2年2月29日(土)～3月7日(土)

会場 東京都美術館

代表者 佐々木 恵陽



第56回菅菰書展は2月29日～3月7日迄開催いたしました。コロナウィルスの感染が騒がれはじめた頃で上野公園は東博、動物園等全て休館で人もほとんど疎らでした。学生部の講堂での授賞式も子供達の安全の為中止となりました。その後の書道界の動きは展覧会の開催自粛が続く、菅菰展はギリギリのタイミングでした。来年の57回展には日常が戻っていることを信じて、今はステイホームです。



## 書王社

### 2019 書王社選拔展

会期 令和元年7月17日(水)～7月21日(日)  
会場 アートガーデンかわさき

代表者 鈴木 映華

暑い時期の開催ですが、工夫をこらした作品45点が涼しげに展示されました。連日沢山のお客様をお迎えし、特に土日は学生部(40点)の家族連れが訪れて大いに賑わいました。太玄会の先生方には、励ましの言葉を戴きありがとうございます。会員の親睦も深まり、大変に有意義な五日間を過ごして無事に終了しました。

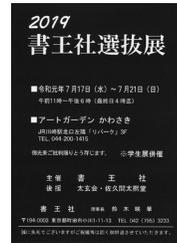
### 書王社条幅研究会

会期 令和元年10月12日(土)

会場 神奈川県立武道館

代表者 鈴木 映華

全国各地に甚大な被害をもたらせた、台風19号の接近により中止となりました。今回も沢山の出席者を予定してただけに、大変残念ではありますが会員の安全を第一にと考えればいたしかたありません。次回は無事に開催できる事を願っております。



## 研友社

### 第32回研友社展

会期 令和元年10月1日(火)～6日(日)

会場 銀座かねまつホール

代表者 田中 鳳柳

第32回研友社展は、令和元年10月1日から6日まで「銀座かねまつホール」で開催しました。会員諸氏42名は、一年間積み上げてきた研鑽成果としての作品を会場一杯に発表することができました。

会場中央には、田中鳳柳会長が所蔵する中国明末の書家、董其昌の瀟洒な筆遣いの卷子と清時代に篆書に秀でた胡澍の尺牘が展示され、来場者の関心を誘っておりました。

末尾となりましたが、多数の太玄会関係者にご来場頂き、誠にありがとうございました。

### 錬成会

会期 令和元年7月21日(日)

会場 鷺毛堂錬成会場

代表者 田中 鳳柳

研友社では、錬成会を春と夏の2回、浦和の鷺毛堂錬成会場を借用して開催しております。

春は、産経国際書展に向けて、夏は、研友社展や太玄展に向けての作品制作を中心として実施しています。



錬成会は、普段研友誌上でしか知りえない各支部先生方の交流を図ると共に、田中会長から直接指導を受けられる貴重な時間でもあります。また、結構や章法などの知識や作品制作上のノウハウを修得できる好機ですので、今後も継続して実施して行く予定です。

### 研修旅行

会期 令和元年11月11日(土)～12日(日)

研修地 群馬県多胡碑

代表者 田中 鳳 柳

研友社の今年の研修旅行は、「錦秋の榛名山と古碑を巡る旅」ということで群馬県の上毛三碑のうちの一つ多胡碑を見学し、多胡碑記念館で職員の方から上毛三碑の丁寧な説明を受け、見分を広めることができました。

この研修旅行の主目的は、会員相互の親睦を図ることであり、今後にも継続していこうと考えております。

### 真仙会

#### 第53回真仙会書道展

会期 令和元年5月31日(金)～6月4日(火)

会場 ながの東急百貨店シエルシエ5階ホール

代表者 小出 聖 州

第53回真仙会書道展は5月31日から6月4日までの間、長野駅前のがの東急百貨店で行われました。併せて小・中学生の学童展も行われ、一般の展示室で表彰式も行われ、真仙会賞に輝いた全員と金銀銅

の代表者が出席、賞状と記念品を受けとっていました。この期間中駅前のホテルで祝賀会も行われ、こちらもにぎやかでした。  
なお令和二年度は総会、第54回展は中止となりました。



多くの方が会場にみえました



学童展で賞状を手にした代表のみなさん



# 鳥跡会

書研社

## 第39回書研社展

会期 平成31年3月22日(金)～24日(日)

会場 アミコ・シビックセンター・ギャラリー

代表者 中尾 勝子

書研社は故田中双鶴先生が昭和54年に創設、育成された書道団体です。毎年1回社中展を行っています。

今年は26名の会員が一人2点(原則漢字一点(仮名1点))50点の作品を展示しました。毎月一回集まってお互いに批評し合ったり親睦を深めながら錬成会を行っています。

今年も双鶴先生の作品や学生の作品、共同作品として臨書作品を展示し好評を得ました

## 鳥跡会合同錬成会

会期 令和元年9月8日(日)

会場 春日会館(徳島市寺町)

代表者 中尾 勝子

鳥跡会は歌の会、一心会、書研社の三つの団体の合同体です。普段はそれぞれの会に会長さんが居て、独自に錬成会や社中展



をして居ます。歌の会も一心会も主として漢字を書かれる人が多いのですが書研社は仮名を書く人が少し多いようです。1年に一度3つの社中が集まって太玄会書展に向け錬成会をしています。今年是一心会が都合で参加されなかった為二つの社中の錬成会となりました。

## 歌の会

### 第26回歌の会書作展

会期 令和元年6月14日(金)～6月16日(日)

会場 徳島県立文学書道館

代表者 弘田 長風

歌の会書作展は第26回となりました。

「書源」という書道誌を中心に錬成をしています。今回も臨書や漢字・



漢字仮名交じり文の創作など、個人の錬成の成果を発表しました。また、会員が扇子に好きな言葉を書き、展示することで会場の華としました。

今年も師・春藤大耿先生の作品の展示コーナーを設けました。璞社会長 江口大象先生に賛助いただき、盛況のうちに終わることができました。

書道研究一心会

第18回一心会書展

会期 令和元年10月25日(金)～27日(日)

会場 阿波銀プラザ

代表者 南 溪 石

一心会は、例年秋に開催している書展にむけて、出品作品の制作を中心に研修会、錬成会を3・4回実施しております。会員の親睦をはかりながら有意義なものとなっています。

本年の一心会書展は10月、阿波銀プラザを会場に実施しました。展示概要につきましては、漢字作品を中心に、調和体、仮名作品を加え総数50点余となりました。

お陰で盛況裡に終わることができました。



九龍社

第60回九龍社書展

会期 令和元年11月29日(金)

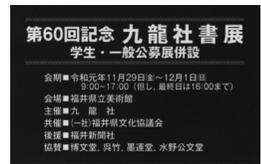
12月1日(日)

会場 福井県立美術館

代表者 垣内 楊石

第60回記念九龍社書展は県立美術館で開催され、その作品は同時に発行された記念作品集にも掲載されました。

広々とした明るい会場には大作が並び、見応えのある展覧会となりました。気迫が伝わる文字数の少ない作品から、繊細で美しい線で書かれた多字数の作品まで、多様な作品に各々の個性が滲み出ていました。訪れた人達は、それぞれの良さを味わいながらゆつくりと鑑賞していました。



### 九龍社宿泊研修

会期 令和元年7月20日(土)～21日(日)  
会場 越前市しづき温泉湯楽里  
代表者 垣内 楊石

緑豊かで静かな  
会場で宿泊研修が  
行われ、参加者は  
垣内先生の添削を  
受けながら練習に  
励みました。



持ち寄った臨書  
作品の鑑賞会も開  
かれ、先生による  
解説で臨書作品の  
見方や書き方を学びました。また優秀作品も選ばされ、総会時に表彰  
されたり会報に掲載されたりしました。  
参加者達が、交流を通して創作意欲を高めることができた二日間でもありました。

### 書研社

### 第43回書研社展

会期 令和元年9月24日(火)～29日(日)  
会場 銀座大黒屋ギャラリー  
代表者 植木 蒼穹

第43回 書研社展  
ご覧覧のうえ、ご好評いただき  
御礼申し上げます。

会期 令和元年9月24日(火)～29日(日)  
AM11時～PM6時  
会場 文庫屋ギャラリー TEL.03(321)0020  
東京都中央区本町2-1-1

代表者 植木 蒼穹

実行委員 植木 蒼穹 佐藤 浩二 石坂 隆雄  
小田 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫  
木下 幸子 藤田 隆夫 小林 寛文  
藤田 隆夫 文島 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫  
文島 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫  
藤田 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫  
藤田 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫 藤田 隆夫

書研社  
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1  
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

第43回書研社展は、銀座大黒屋ギャラリーにて開催いたしました。行草体を中心にしながらも調和体、かな作品も並び、各人の表現を尊重したバラエティーに豊む会場となりました。

創作は28点、臨書は4点。創設者植木九仙の半切大「風香雪月」と良寛詩の小品も飾られ、会員遺墨1点が加わり、総計35点。

本年9月には44回展を予定しております。ご高覧賜りたくお待ち申し上げます。

### 高友社

### 第41回高友社書展(学生書展併催)

会期 平成31年4月15日(日)～19日(金)  
会場 上野の森美術館 2階  
代表者 露野 雅宣

今年も上野の森美術館にて、一般112点、学生161点の参加を得て開催された。作品は高友社らしい自由な発想のもと明るく伸びやかなものが多かった。学生展も昨年より軸表装にしたことで、より展示映えがした。また保存もしやすくなって参加者にも好評だった。



第41回 高友社書展  
(学生書展併催)

ご高覧賜りたくご案内申し上げます。

会期 平成31年4月15日(日)～19日(金)  
午前10時～午後6時(観覧は無料)

会場 上野公園内上野の森美術館2階  
TEL.2633-4191

主催 高友社  
上野の森美術館  
後援 毎日新聞社

15(日)	16(月)	17(火)	18(水)	19(木)
午前				
午後				

※この会場は無料  
高友社、東京書籍株式会社、41-1  
[協賛] 毎日新聞社、11月まで  
(二品山荘美術館、11月まで)



会場は平成から令和へ時代が進む息吹が感じられる、明るさに満ちていた。太玄会の多くの先生方にご来場いただき、誠にありがとうございました。

### 第11回高友社合宿

会期 令和元年8月25日(日)～26日(月)  
 会場 ニューウェルシティ湯河原  
 代表者 露野雅宣

恒例の夏合宿を今年も湯河原の定宿で行った。一日目は昇段試験や各書展への作品制作を幹部先生方からの指導を受けつつ取り組んだ。二日目は篆書の学習会があり、篆書の歴史や魅力について講義を受けた。

合宿の最後には理事長はじめ男性陣が巨大な筆で超大作に挑戦した。その力強い書きぶりや紙面を圧する大作を目のあたりにして、書き手も見学者も一体となつて感動の時間を過ごすことができた。



### 鼎墨会

秋季合宿錬成会  
 令和元年10月18日(金)～20日(日)  
 会場 秩父民宿こかばし  
 代表者 遠藤有翠

鼎墨会では春と秋の2回2泊3日の合宿錬成会を行っている。それは太玄会書展と官公書展に向けてのものであるが、会員同士の競い合い、コミュニケーション等、良い刺激の場ともなっている。今回は秩父の民宿「こかばし」での錬成会で静かな環境の中での太玄会書展への書き込みに各自心地良い汗を流した3日間であった。



### 青龍会

第49回青龍会書展・学生書展  
 会期 平成31年4月27日(土)～29日(月)  
 会場 すみだりバーサイドギャラリー  
 代表者 下谷蕪雪

新年号が4月1日に発表になり、平成最後の展覧会になることを



意識し、葉書きサイズの用紙に「令和」の文字（書体自由）を幼年から大人まで全員で書き会場入口のパネル4枚に貼り出し新年号「令和」を祝った。会場内にも用紙を用意し来場者の方にも揮毫をしてもらった。

次年50回記念展の前挑戦の意を込めた作品も並び、又素晴らしい生花の生け込みが映え会場を明るくしました。ご来場下さりご指導を賜りました先生方に感謝を申し上げます。



## 燎原社

### 第55回燎原社書展

会期 令和元年8月31日(土)～9月1日(日)

会場 シアター1010ギャラリー

(北千住丸井11階)

代表者 堀越 壽 崑

令和元年、改元して装いも新たに第五十五回「燎原社書展」を開催しました。今年のテーマ「松竹梅」を思いのままに表現した大小の作品は、変化に富む会場作りに一役担ったのではないのでしょうか。表彰式は毎年大勢の方が来場されるので長時間に及ばぬ様配慮のもと、無事盛会裡に終了しました。



令和2年度太玄会所属団体の活動予定

団体名	代表者	活動内容	開催日時	会場
書星会	宮負丁香	第68回書星展	11月10日(火)～11月15日(日)	東京都美術館
菅菰会	石川流芳	第57回菅菰書展 併催全国学生展	3月2日(火)～3月7日(日)	東京都美術館
書王社	鈴木映華	2020書王社選抜展	7月15日(水)～7月19日(日)	アートガーデンかわさき
研友社	田中鳳柳	第33回研友社展 錬成会	中止(誌上展に変更) 7月19日(日)	鶯毛堂錬成会場
真仙会	小出聖州	第54回真仙会書道展	中止	
鳥跡会	中尾勝子	第40回書研社展	中止	
	弘田長風	第27回歌の会書作展	中止	
	南溪石	第19回一心会書展	10月23日(金)～10月25日(日)	阿波銀プラザ
九龍社	中尾勝子	鳥跡会合同錬成会	10月11日(日)	春日会館
	垣内楊石	第61回九龍社書展	8月7日(金)～8月9日(日)	福井県立美術館
		九龍社研修会	8月23日(日)	ふれあいみんなの館・さばえ
書研社	植木蒼穹	第44回書研社展	9月22日(火)～9月27日(日)	大黒屋ギャラリー
高友社	落野雅宣	第42回記念高友社書展 学生書展併催	中止	
		第12回高友社合宿	中止	
鼎墨会	遠藤有翠		未定	
青龍会	下谷蕪雪	第50回記念青龍書展 学生書展併催	中止	
燎原社	堀越壽嵩	第56回燎原社書展	9月5日(土)～9月6日(日)	

## 特集

### 令和二年に思う

書星会 宮本芳秀

第六十一回太玄会書展において、「私にとって生涯忘れる事のできない年になりそうです」と謝辞を述べさせていただきました。

その後、新型コロナウイルス感染が蔓延し、東京オリンピック・パラリンピック、さまざまな行事や書展が延期や中止となりました。世界中がコロナウイルスに振り回され、今まで当たり前のように過ごしていた事が、いかに平和で幸福であったか、思い知らされる日々が続いています。

振り返れば、小学校の三年の担任の先生の黒板の字が綺麗で、少しでも先生の字に近づきたい一心で、一生懸命ノートに書き写し、書く事が好きになりました。その頃は書道の歴史や奥深さを知る由もありませんでした。

高校の芸術選択で書道の日暮曠岱先生にお会いし、競書誌「書星」に入会。その後三人の子供に恵まれましたが、誕生日日まで書き続け不出品は一度もありませんでした。書けば書くほど難しく、わからなくなり、挫折する事も多々ありました。先生が「勉強中の法帖を眺めているだけで良いんだよ」、「書展には良く足を運ぶんだよ」と声をかけてくださり、続ける事ができました。お陰様で、成田山奉仕団とし

て筆耕の仕事を推薦して頂き、元日から一月中、四十年近く、休む年も無く続け、太玄会書展後に「特別功労賞」の表彰を受けました。良き先輩、書友に助けられ今日に至っています。

太玄会展は多くの会から成り、一会場で多くの会派の作品を鑑賞する事ができます。先人の先生方の力に感謝し、太玄会の一員にさせていただいている事に喜びを感じています。

時間を持て余している人が多い年令になっても、無我夢中になれるものがあります。新型コロナウイルス感染が落ち付き、かつての日常に戻る事はできないにしても、新しい日常に戻り、子供達に書く楽しさとすばらしさを伝えて行けたらと思うこの頃です。



# 古典への思い

書人社 望 月 擁 山

このたび会報への寄稿の機会をいただき、あらためて自身が古典から何を受け取ってきたのか、振り返ることにいたしました。

書への入門は、私立巢鴨中学校の書道班に入った十二歳の時のことです。その中で、古典と向き合った時期というのは、正直に告白すれば長くありません。中学では、もちろん唐代の楷書や王羲之などの臨書から入る訳ですが、高校では程なく調和体に取り組みようになりました。当時の私のおもな関心は、詩文や古典文芸を、師である江原見山先生の書風で作品にすることにあり、文学的な感興、詩情に物理的な形象が与えられることの面白さこそが、私にとつての書の楽しさでした。大学時代も、書を学ぶ者の嗜みとして臨書はしましたが、それよりも存命の先生方の作品に魅了され、それを模倣することに、より多くの時間と熱を注いだように思います。

公募展に出品するようになり、その状況が変わりました。当初四、五年は調和体で出品しておりましたが、江原先生のご指導で、出品作のスタイルを北魏代の楷書の小字数書に変えました。多数字の章法が下手であるとか、柔らかな書体に向いていないと思われたとか、色々と先生のお考えを推察しましたが、結果的にこれが古典に向かう契機となりました。

楷書作品を書くうえで、まずは梅原清山先生や江原先生、書人社の先生方の、魏々たる過去作品を勉強しますが、それでは足りないことは早々に感じました。古典との接続がないと、表現の表層を追い、枝葉末節に拘って幹を見ないような「浅さ」が透けます。師のように書きたければ、その源流から水を汲む必要がある——そう思つて青山杉雨先生、西川寧先生、そして碑学派の書家たち、墓誌銘や造像記へと廻りました。草稿や作品制作の過程でマンネリに陥ったときも、龍門二十品の拓本や趙之謙を繙き臨書します。淀んだ空気が払拭され、目線が上がつて視界が広がる気がいたします。

北魏代の楷書を書き始めると、『九成宮醴泉銘』など唐代の楷書にも関心が向くようになりました。唐の楷書は完成されており、足すことも引くこともできず、書き手の主張を託す余地が少ないというのはよく言われる話です。ですが、派手な表現をしたいと気持ち之急ぎ、字形を玩弄しているのではと不安になった時、欧陽詢や褚遂良はどう書いているのかと立ち返ります。作品としては出ませんが、唐代の楷書も汲めども尽きぬ魅力を湛えており、臨書でそれを汲むのは愉しい作業です。

楷書の古典群のほかに、別の意味で大事にしている古典作品がもう一つあり、それは呉昌碩の『瓶梅図』です。十年前に、結婚



歐陽詢『九成宮醴泉銘』

祝いとして知人からレプリカを譲り受けました。書というより画の作品ですが、青山先生の『古帖閑臨』のレプリカとともに、最も長く書齋に飾っているものです。画賛に「年八十四」とあり、呉昌碩晩年の作です。

この作品は、直接技術的なものを掬おうという気を起こさせるものではありません。画賛の行草は篆書書き特有の趣があり、また枯淡の境地といえ、とても真似できるようなものではありませんが、強く惹かれます。淡墨の壺から延びる梅の枝と画賛の狭間にある余白の妙は凄まじく、人生でこんな白をつくれるものだろうかと思わせるものがあります。北魏代の楷書は、基本的には「強さ」の書であり、そういった猛々しく雄々しい作品を書く書齋には、穏やかなものを置いておきたいというのが自分の心理にあるのだと思います。見ると落ち着き、書はこんな在り方もある、と言っているように思います。また『瓶梅図』に触発され、遊びで画を書くこともあります。一般の方々にとつて墨絵は親しみやすいよううで、個人的に行なっている展覧会では、書よりも画の方に多くのリアクションを頂きます（やや複雑な気持ちですが）。

書齋で楷書の作品制作に没頭し、頭がかつかかとしていたときに、ふと『瓶梅図』が視界に入ってくるがあります。呉昌碩が詩・書・



張猛龍碑



呉昌碩『瓶梅図』

画・篆刻の「四絶」であったことを思い、「書のみをしていても、己はこの程度か」と考えると、逆に力が抜けて自然体で書くことができます。八十四になったときに、技術だけでなく多様な経験を含んだ書、文人の書を書けるようになっていべし、そう論じてくれているような座右の古典です。

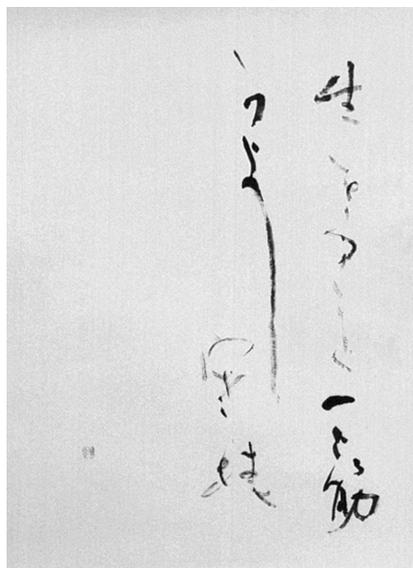
## 仮名の美しさに魅せられて



真仙会 山崎 洋子

綺麗な字を書きたいと意識しはじめたの小学五、六年の頃でした。黒板に書く担任の先生の字にあこがれ、万年筆を買ってもらって、家で真似をしたものでした。毛筆も好きでしたが本格的に始めたのは社会人になって、職場のサークルに入ったのが始まりでした。

改めて真白い紙と黒の線のコントラストに魅了されつつ、漢字からの出発でした。その後結婚で中断、数年を経て仮名の美しさにひかれ、仮名の先生の門をたたき、手ほどきを受けました。「寸松庵」他、古典の臨書「寸松庵」の小さな紙面の中で大きく見える筆使い、余白。又「香紙切」の細い線のリズム感、大きな動き……。今になって見える



吉川先生の作品

素晴らしさも当時はそんな余裕もなく只形を真似るだけが精一杯でした。

その後、奈良の青丹会への道をつけて頂き仮名の大家である会長の吉川美恵子先生にご指導頂いて現在に至っています。

吉川先生の変化のある字形・濃淡による強弱・効果的な余白・水墨画の世界の遠近感と余韻、それらを瞬時に紙面にくり広げる様に感嘆の溜息をつきつ、なんとか少しでも吸収出来たらと思いつつもなかなか難しく力のなさを常に実感しております。

又、師の作品を始め、いろいろな言葉からも学ばせて頂く事が多く、そんな中で思うことは、特に仮名書道は、万葉集等の和歌・現代短歌・詩歌等の文学的要素・水墨画等に見える絵画的要素、そして又「リズム」の強弱、又流れ等の音楽的要素を加味せなえた「総合芸術」と思えます。難しいですが師の言われる水墨画の世界を目標に遅々ながら努力して参りたいと思っています。

今後ともどうぞよろしく御願致します。

## 師と共に歩んだ日々



書王社 吉田恵子

学生の頃から書道には関心があり、機会があつたら書道を習つてみたい。と思いつながらもその思いは果たすことが出来ず、子育てに追われる日々を過ごしていました。しかし、少しでも自分の時間が持てたら何か始めたい。という気持ちが常にあり、書道はその最有力候補でした。そんなある日、近所で書道教室を開いていた池田先生より、「書道を始めませんか」と声をかけて頂く機会がありました。私にとつては又とないチャンス、即、書道教室入会を決めました。正に書を始めるきっかけを作って下さった池田先生との嬉しい出会いでした。気さくで穏やかなお人柄の池田先生の下、今は亡き書王社社長、鈴木景堂先生の書を学ぶ事になり、月例の楷書作品に取り組む時間は何とも楽しく、少しづつ昇級していくのが書続ける励みになっていました。



大玄大賞受賞作品

太玄会書展の話を受けたのはその一年後、まずは何事もチャレンジする心意気が大事と景堂先生より直筆のお手本を頂き練習を始めました。太玄会書展初出を果たした数年後、池田先生の勧めがあり、景堂先生の直門に移り、直々に景堂先生より指導を仰ぐことになりました。週一回通う教室では、折にふれ、古典の大切さ、書の奥深さなど、時にはユーモアを交え、話を聞かせて下さいました。作品作りの際は厳しい指導を受けながらも、なぜか今は、それが懐かしくもあり、嬉しささえ感じています。

神奈川県立武道館では、文武両道を目指し十数年前より書道教室が開催されました。書王社が講師の依頼を受け、書王社岸根教室として立ち上がり、現在は大人百三十名、子供六十名余り、今では全部で六クラスの大所帯になっていきます。その中で、中学生以上と大人の混合クラスを担当し九年目を迎えます。景堂先生より講師の話を受けた時は、「知識も浅くまだ未熟な私になぜ」。降って沸いた様な話に驚き迷いながら、引き受けた事に初めの頃は、後悔



書王社条幅研究会の様子（県立武道館にて毎年開催しています）

の連続でした。今思うと、人に教える事は難しいが、自分にとっては、より成長出来る良い機会になる。その為には、もっと積極的に学ぶこと。それが自信に繋がりが良い作品作りにも繋がるのだと言う師の教えだったのかと。新たにチャンスを与え、背中を押して下さいる師の存在は有難く感謝の一言に尽きます。

緊張しながら通い始めた武道館への道のりも九年目ともなると、毎回一時間半かけて通うのが日常の一部になりつつあります。当時から、いつも暖かく手を差し延べ支え続けて下さった先輩の先生方の存在にも、改めて感謝の思いを強くしています。

四十年近くに渡り、恵まれた環境の中で書道が続けてこられた幸せをかみしめながら、いつも寄り添いここまで導いて下さった師の思いを受け止めて、今後尚一層精進して参ります。

## 編集後記

昨年、創立60周年を迎え今年は新たなスタートとして、第61回玄会書展、授賞式、祝賀会を開催することが出来ました。今回から学生部に高校生の部も開設され、展覧会場には多くの方々にご来場を頂きました。

期間中の特別講演では、日展会員の吉澤鐵之先生による「私と書」と題してご講話を賜り、吉澤先生の書への情熱と蘊蓄のある内容、そしてお人柄に触れることが出来ました。祝賀会では日展理事の高木聖雨先生をはじめ多くのご来賓の皆様からご祝辞を賜り、15団体の書表現の特長にお互いが触発され、さらに新しい表現を目指して欲しいという期待のお言葉も頂きました。その閉会の挨拶で西村東軒副会長が「ご来賓の過分なる励ましと期待に応えるためにも「今の太玄会はこのままではいけない。もっとみんなが切磋琢磨して成長しなければ」と会員の心を鼓舞する言葉がありました。太玄会が15団体から構成されているという他の会派にない特色をこれからのように生かしていくか、創立61年目を迎え新たなスタート地点に立った今、大きな宿題を頂きました。

その後、世の中は新型コロナウイルス感染症対策のため、外出も会合も控えることとなり、4月に予定されていた総会も見送ることとなりました。何より私たちにとって書も生き方も自己修正をする場であるお稽古もままならない日々が何ヶ月も続いています。誰も経験したことのないこの状況の中、人と人との繋がりは遮断され、自分ではどうする事も出来ないもどかしさを感じる日々が今後何時まで続くのか。しかし、私たちは人との絆の中でしか生きられないこと、この世での本質や真理とは何かを考える機会を得られ、感謝と物事を見つめる深い眼を養うことが出来たことは怪我の巧妙、塞翁が馬でした。

こういう時にこそ癒しを求めるだけでなく、次に進むべき道を模索し行動に移すことが自らを、そして周囲を豊かにしていくことに繋がると考えます。このコロナ禍も出口は必ずあります。易経に「時流ではなく時中を生きよ」とあり、六十四卦の乾为天に「天行健なり、君子自彊して息まず」とあります。これは、努力を続けることの大切さを説いています。物事の陰と陽は表裏一体であり、時を読んで進むことが大切です。龍が大空へ飛び立ち自由に舞うためには屈伸が必要です。新たな時代へ飛び立つためにも、今は方向をしっかりと定め、屈伸する時期と捉えれば自ずと道は見えてくるでしょう。

令和2年8月

広報部長 荒井湧山

令和二年九月発行

太玄会報 第76号

発行者 太 玄 会

編集者 太玄会事務局広報部

制作 (株)風雅プランニング